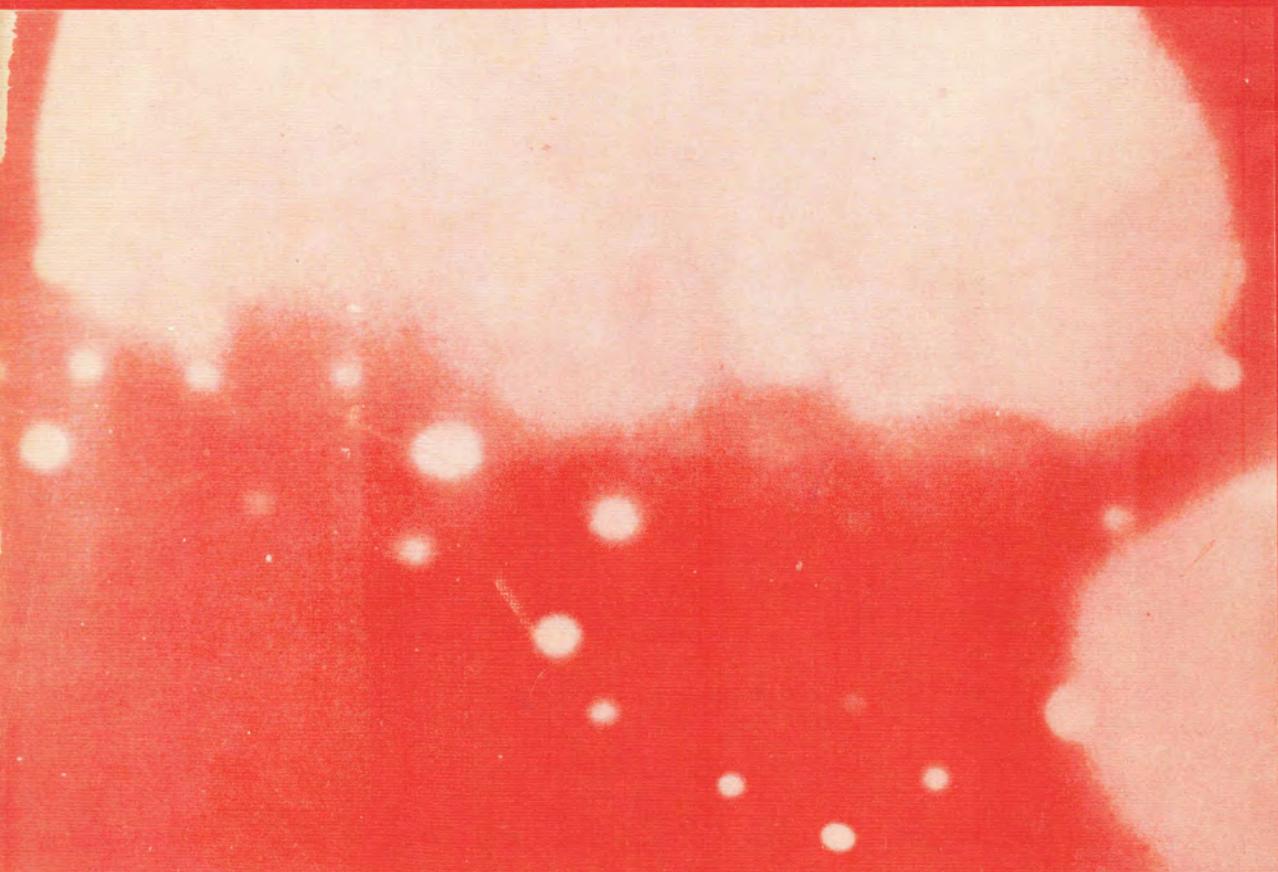


UFOと宇宙哲学の研究誌

GAPニュースレター

53



GAP ニュースレター第53号目次

生きるための助言(5).....	J・クリジナムルティー	1
われら何を学ぶべきか.....	波多慎一	6
生命の科学かヨガか.....	井上芳人	11
UFO研究と科学的態度.....	清水畑博	14
光の子と闇の子のたたかい.....	久保田八郎	24
ジョージ・アダムスキーの思い出.....	デズモンド・レズリー	29
<改訳>空飛ぶ円盤同乗記(6).....	G・アダムスキー	34
「声」.....		46
わが国最初のUFO専門誌誕生.....		50
日本GAP大阪支部大会盛況.....		51
月例研究会案内.....		51
編集後記.....		52

☆表紙写真は一九五一年五月十六日、ジョージ・アダムスキーが六インチ反射望遠鏡を用いて撮影した月面付近の円盤群

❁ GAPとは



GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々が空飛ぶ円盤の真相について「知る」機会を与えられるべきであるという見地に基ずいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて『コスミック・パワー』の御子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界(惑星)から来る友好的な訪問者からもたらされた『生命の科学』の研究と理解を通じて体得できるものです。

日本GAPの目的は円盤とスペースブラザーズ問題に関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群から偉大な発達をとげた人類が地球を訪問しつつある。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト(接触)しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペースブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の起源と未来の運命の真実を知るのに有益である。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

◎GAP参加グループを有する国は次のとおりです。

アメリカ、オーストラリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、イングランド、フィンランド、ドイツ、オランダ、インドネシア、日本、メキシコ、ノルウェー、スウェーデン、スイス(ABCの順。1971年6月現在)

☆本誌掲載記事の内、海外関係のものはすべて翻訳転載権取得済。禁断転載。

生きるための助言⁻⁵



ジッドウー・クリシュナムルティー

● 感受性

そこは低い芝と蔭の多い古い樹木のある美しい庭だった。家は大きくて風通しのよい形よく作られた広々とした部屋がいくつもある。木々は多くの小鳥やリスに蔭を与え、泉にはいろいろな形の鳥がやって来て、ときにはワシも来るが、ほとんどはカラス、スズメ、それに騒々しいオウムたちである。家と庭は人里離れた所にあり、しかも高く白い壁で囲まれているので、よけいに目につかない。壁の内側にあるので心地よく、外側には道路や村の騒音があった。門の前を道路が通り、その道路に沿った数ヤードからは村となるが、そこは大きな町の郊外である。村はきたなくて、主要路であるせまい道の両側にはフタのない水路がついている。家々はワラぶきで、正面の階段には装飾がほどこされていて、道路で子供たちが遊んでいる。数名の織り手が布を作るためのきれいな長い糸を張っており、一団の子供がその仕事を見ている。騒がしくてニオイのたちこめる楽しい光景だ。村人たちは体をこぎれいに洗っており、暑いのでほとんど何も着ていない。夕方近くになると彼らは酒を飲み、声高く話し合っている。

生氣で脈動している村からその美しい庭を切り離しているのは一つの薄い壁だけである。醜悪さを否定して美しさに固執することは無感覚になることである。逆なもの求めようとすれば常に心をせまくして精神に限界を設けねばならぬ。徳とは何かの逆なものではない。それが逆なものを持っているとすれば、それは徳ではなくなるのだ。その村の美し

さに気づくことは、緑色の、花に満ちた庭に対して感覚的になることである。われわれは美しいものだけに気づこうとし、美しくないものから自分を切り離そうとする。この抑制は無感覚を生み出すだけで、美しいものに対する鑑賞眼を生み出さない。善なるものは村から離れたその庭の中にあるのではなく、村や庭とは別なところに存在する感受性の中にあるのである。否定したり同一化したりすると狭量になるが、それは鈍感になることもある。感受性(敏感さ)は心(マインド)によってつくり出されるのではない。心は物事を分割したり支配したりするにすぎない。この世には善と悪があるけれども、一方だけを追求して他方を避けることは、実際の人間にとって根本的に重要な感受性を生み出すことにはならない。

真実は幻覚やニセモノの逆ではない。もし何かの逆なものとしての真実に近づこうとするならば、それは決して現われてこない。真実は逆なものがない。逆でなくなるときにのみ存在し得るのである。非難したり同一化したりすることは相反するもの同士を争いを生み出す。そして争いは更に争いを生じるのである。否定したり正当化したりすることなしに、無感情にアプローチされる一つの事実は争いをもたらしさない。一つの事実は本来その逆なものをもたないものである。楽しい、または防衛的な態度があるときのみ、その事実は逆なものをもつのである。鈍感という壁を作り、行為を破壊するのはこの態度なのである。われわれがその庭にとどまる方を好むならば、村に対する抵抗がある。そして抵抗がある場合は庭の中にも村に対しても行為はあり得ない。活動性はあるかもしれないが、活動はない。活動性はその逆なものをもつ。その逆なものの中にある運動は、いかに拡張され修正されても活動性にすぎない。活動

性は決して物事を自由にすることはできない。

活動性は過去と未来をもつが、活動はもたない。活動は常に現在の中にあり、それゆえ即時的なものである。改良は活動性であり、活動ではない。そして改良されるものは更に改良を必要とする。改良とは不活動であり、それは逆なものとして生まれる活動性である。行為は瞬間から瞬間へと移動するもので、奇妙なことにそれは本来の矛盾なのである。しかし活動性は、破たんがないように見えるかもしれないが、矛盾に満ちているのである。改良しようという活動性は多くの矛盾でもってふるいにかけれられ、それゆえに決して自由になることはできない。争い、より好みなどは決して自由になる要素ではない。もしより好みがあれば活動性はあるが、行為はない。なぜなら、より好みは理念にもとづいて行からず。心は活動性にふけることもあるが、行為することはできない。行為はまったく異なる源泉から生ずるものである。月は村の上空に昇り、庭に多くの影をつくった。

● 既知と未知

夕暮れの長い影が静かな水面に落ちて、川は一日が終わったあと静まってきた。魚は水面からとび出し、大きな鳥たちが大きな木々のあいだにやってきた。銀青色の空には雲もない。人がいっぱい乗った船が川をくだってくる。みんなは歌い、手拍子を打っている。牛が遠くで鳴いた。夕暮れのニオイがたちこめる。キンセンカの花環が水とともに動き、水は沈む陽光の中にきらめく。すべてが何と美しく生き生きしているこ

とだろう。川、小鳥たち、木々、そして村人たち——。

われわれは川を見おろす一本の木の下にすわっていた。その木の近くに小さな寺院があり、数頭のやせた牛があたりをぶらぶらしている。寺院はきれいに掃除がしてある。花の咲いたヤブには水がかけられ、手入れがゆきとどいていた。一人の男が夕方の権行をやっており、その声は忍耐強く、悲しそうである。太陽の最後の輝きのもとに水は新生の花々の色を帯びている。

まもなくだれかがわれわれに加わり、自身の体験を話し始めた。彼は神を求めて人生の多年をすごしてきたという。多くの苦行をやり、多くの好みの物事をたち切ってしまった。また社会活動や学校の設立などかなりの援助もした。多くの事に関心があったが、最大の関心は神を発見することにあつた。長年月を経た現在は、神の声が聞かれるようになり、それは大小の物事で彼を導いた。彼は自分自身の意志を持たず、内部の神の声に従った。ときどきその明確さがにぶることはあつたけれども、決して彼を失敗させなかつた。彼の祈りは肉体の純化のためであつた。

はかり知れないものがあなたや私によって発見できるだろうか？ 時間に属さないものを時間で形づくられたものによって探し出すことができるだろうか？ 一生懸命に守られた戒律が人間を未知なるものに導くだろうか？ そのような真実なるものが人間の欲望の綱の中に捕えられだろうか？ われわれが捕え得るのは既知のものの投影である。しかし未知なるものは既知なるものによって捕えることはできない。名づけられているものは、名をつけることのできないものではない（だから名づけられた）。そして名づけることによって人間は条件反射を起こすにすぎないのである。この条件反射はどんなに高貴で楽しいものであつて

も真実なるものではない。われわれは刺激に対して反応するが、真実なるものは刺激を提供しない。それは「存在する」ものなのである。

心（マインド）は既知のものから既知のものへと動く。それは未知のものへ到達することはできない。人間は知らないものについて考えることはできない。それは不可能である。人が考える物事は既知のもの、過去のものから出てくるのである。この過去は多くの影響物によって考えられ、形づくられ、条件づけられて、それ自体を環境や圧力などに従つて修正するが、常に時間の経過をとどめる。想念はただ否定するか肯定するだけのことで、新しいものを発見したり探し出したりすることはできない。想念は新しいものに出くわすことはない。しかし想念が沈黙するならば、そのとき新しいものが現われるだろう。けれどもそれはすぐに想念によって「古いもの」や「体験されたもの」に変えられてしまう。想念は体験というボタンに従つたえず形成したり修正したりゆがんだりする。想念の機能は伝達することにあるが、体験の状態にあるのではない。体験という行為がとまるとき、想念がそれにとつてかわり、既知のものの中の範囲内でその行為を名称づける。想念は未知のものの中に突入することはできない。だからそれは決して真理を発見したり体験したりすることはできないのである。

（注|| 以上は、センスマインドは未知のもの——特に神を——知ることはできないこと、人間の想念は「習慣的想念」にすぎないことを意味している）

戒律、克己、超然たる態度、徳の実践——これらはいかに高貴であつても想念の働きにすぎない。しかも想念は、既知のものである終局や達成の方向にのみ働き得るのである。達成とは安全であり、既知なるもの、自己防衛的確實性である。名称づけられていないものの中に確實性を

探し求めることは、それを（確実性を）否定することである。見出されるかもしれない確実性は、過去または既知なるものの中にあるにすぎない。このため心（マインド）は完全に沈黙しなければならぬ。しかしこの沈黙は犠牲や理想化や抑圧などで得られるのではない。この沈黙は心が探し求めるのをやめるとき、何かになろうとするのをやめるときにやってくる。この沈黙は蓄積されることによってくるのではなく、また練習によって作り上げられるものでもない。この沈黙は心にとっては永遠と同じほどに未知なるものでなければならぬ。なぜなら、心が沈黙を体験するならば、過去の沈黙を体験している、しかも過去の諸体験の結果である「体験者」が存在することになるからである。体験者によって体験されるものは自己投影の反覆にすぎない。したがって心は完全に静まる必要があるのである。

心はみずから体験をしていないときにのみ静まることができる。つまり心が物事を名称づけたり記録したり記憶にたくわえたりすることをしないとときに静まり得るのである。この名称づけと記録は意識の異なる各層のたえまのない作用であって、単なる表面の心の作用ではない。

（注Ⅱ）ここでいう意識は「宇宙の意識」ではなく、通俗的な意味での意識である）

しかし表面の心が静まるとき内奥の心がその啓示をもたらすのである。（注Ⅲ）センスマインドが静まればソウルマインドが啓示をもたらすというア氏の哲学と同じ意味である）意識のすべてが静まりかえって、自然の状態であるあらゆる生成から自由になるときだけ、無限なるものが現われてくるのである。この自由を保とうという欲求は、真理に対して妨げとなる心の記憶に永続性を与える。真理は永続性を持たない。それは一瞬一瞬に現われるもので、常に新鮮である。永続性を持つものは

決して創造的ではない。

表面の心は意志伝達の道具にすぎない。それは無限なるものを測ることはできない。真理は言葉で語られるものではない。語られるならばもうそれは真理ではない。

● 自我

向いの席にはかなり地位の高い人がすわっていた。その人は自分の地位をよく意識していた。その顔つき、動作、態度などが本人が重要人物であることをあらわしているからだ。彼は政府のトップクラスの人で、周囲の人々はきわめて追従的であった。彼はつまらぬ公的な仕事で自分がかかわりあいをもつのは迷惑だと、そばの人に大声で話している。そして部下たちのやっていることにガミガミいい、周囲の人たちはイライラして不安そうであった。

われわれは雲海のはるか上空を飛んでおり、雲間には青い海が見えていた。雲が切れると雪でおおわれた山々、島や大きな湾などが見える。孤立した家や小さな村がなんと美しいことだろう！山脈の方から海へ川が流れている。それは大きな町の中をつらぬいているが、そこはにごってよごれていて、川の水はよどんでいるが、更に先へ行くと、また澄んできらめいていた。

機内の少し離れた座席には制服を着た一人の将校がすわっており、胸には多くの略章がついて、威張って超然としている。その人は世界中に存在するある分離した階級に属しているのである。

一体なぜ人間はやたらと他人から認められようとして、重視されようとして、勇気づけられようとするのだろうか？ なぜ人間はこんなエセ紳士になるのだろうか？ なぜ名前や地位や財産を独占することにこだわるのだろうか？ なぜ有名になろうとするのだろうか？ なぜ自分自身の存在に満足しないのだろうか？

自分が認められ、ほめられようという欲望があまりにも強いのは奇妙なことである。戦争の興奮のさなかにあれば、人は自分が名誉を受けようとして信じられないような事をやっつてのけたりする。そして同胞を殺して英雄になる。特権、頭脳、能力、能率などによって人はトップクラス近くの地位に昇る。しかしトップは決してトップではない。なぜなら成功という陶醉にはキリがないからだ。国とか事業とかは個人自身にかかっている問題である。その問題は個人次第でどうにもなるからだ。個人はその力を持っているのだ。組織化された宗教は地位、貫録、名誉などを与えてくれる。そしてここでも人はひとかどの人物になれるのである。あるいは指導者の弟子となり、その仕事を協力する。本人は重要人物となり、指導者の代理となり、その責任を分担し、更にそれを他人にわかち、相手はそれを引き受ける。しかし指導者の名前を利用してはくれどもやはりその媒介物にすぎないのである。人は腰巻を巻くかまたは僧服を着てもよいが、そのジュスチャーは“本人”がするのであり、そんなことをやらないのも“本人”なのである。

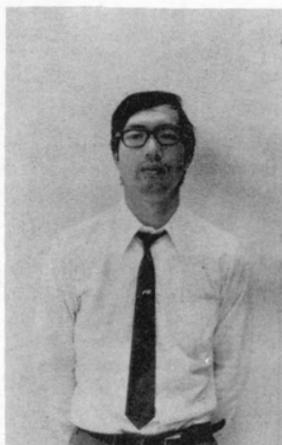
なんらかの方法で自我は微妙にまたは大きく肥やされ維持される。その反社会的、有害な行為は別として、なぜ自我はそれ自体を維持する必要があるのだろうか？ 人間は過ぎゆく快楽とともに騒ぎや悲しみのなかにあるけれども、なぜ自我は内面や外面の満足に執着するのだろうか？ 否定の逆である肯定的な活動をしようという欲求は人間を“存在”せし

めようとして本人に努力させる。人間の努力は、自分が生きていること、生活に目的があること、争いや悲しみの動機を次第になくしてしまおうということなどを感じさせる。人間が感じるのは、もし人間の活動が停止したならば、人間は無の状態となり、自分が失われ、生活がまったく意味のないものになるだろうということである。そこで人間は争いや混乱や敵対行為を続けるのである。しかし人間はもっと大いなるものが存在し、このような不幸のすべてを超えた“他のもの”が存在することに気づく。こうして人間は自身の内部のたえまのないたいたいのなかにあるのである。

外面が大げさに見せかけようとするほど内面はますます貧弱になってくる。しかしこの貧弱さから解放されることはフンドシ一つになることではない。内面がカラッポになるのは自分が望むものになろうという欲求であり、それを実行することであるが、このカラッポは決して満たされることはない。人は粗野なまたは洗練されたやり方でそのカラッポから逃避することはできるが、そのカラッポは影のように本人につきまとう。本人はそのカラッポの中のぞき込みもしなくとも、やはりそれは存在する。自我がよそおう装飾や断念はこの内面の貧弱さをおくすことはできない。自我は絶対に自分自身をおくすことはできないのである。

しかし人がそのカラッポに直面し、痛ましいさびしさとともにあることができれば、恐怖は完全に消滅し、根本的な変化が起こってくる。この状態をもたらすにはそのカラッポの経験をしなければならぬ。しかしもし経験者が経験をもちつらば、もはや経験しつつかあるという状態はない。“存在する”ものからの解放をもたらすのは、それを名称づけることなしに“存在する”ものの経験の行為にあるのである。

われら何を学ぶべきか



波多慎一

場合、そこが着陸に適するか、どのような状況にあるかを見究めてから着陸するであろう。だからごく簡単に彼らは「まだ」着陸しないのだと考えることは可能である。でもよく見ると、これは不足のある意見だ。地球の大気を勝手気まま自由自在にとびまわっておって、そして飛行機や羊や電柱などを観察できるほどの彼らが、ちょっと降りて歩きまわることぐらい雑作もないことである。

なぜ円盤は着陸しないか

私は円盤が着陸しないという仮定に立っている。着陸しないのはなぜか。彼らはいろんなものを観測した中で次の重要な点を観測したのである。すなわち、地球上には彼らの着陸を危くする人類というものが存在することを。

地球の物理学にあつては、地球以外の惑星には生物生存の見込みがないとされてきた。そして地球の文明を生み出した自分たちを太陽系でもっともすぐれた存在であるとなした。すなわち太陽系で人類のような高等生物が存在するのは、この地球だけであると。けれど上には上があつたのである。彼らの乗り物は地球人の幼少の頃愛する品、玩具に似ている。そこでしかめつらの好きな人、例えばメンセルはこれを性欲の変化した妄想であるといったりする。こいつは自分がそうだから人もそうであろうという悪い遺伝子をもって生まれてしまった男である。目

私は前に円盤のうわさが広まったとき、これは外世界からの訪問者であることを容易に看破した。これは頭の問題でちょっとすぐれた精神をもっていれば容易に達せられる推察である。ところで、ケネス・アーンولد以来のこのブームの中で当初私には円盤はなぜ着陸しないのが疑問とされた。けれども

今ではあちこちにこの事実があるのでこれを仮定として事実を論外に置くことにしよう。すると、地球上には彼らの関心をひくものが存在するが彼らの着陸を容易にしない何らかの支障が、あると。関心をひくものというと物質的なものか精神的なものか、または何かである。もし地球人が他の惑星に行った

の錯覚である、空中のゴミである、冷気の反射現象である、気球や鳥や飛行機であると、しかめつらをして片づけようとする。けれども、目あって大山を知らず、井の中のカワズというやつである。円盤はこうした地球の状態にくらべておそろしく進歩したところから来るので、奇妙な、子供じみた感じがある。これが妙なもので、あまりにも進歩した乗り物は私たちには逆におもちゃとしか考えられない。ちよんどうアフリカの未開の黒人が飛行機を見ると、大きな鳥といって、大きなヤリ、あるいは大きなブーメランとはいわれないのと同様である。そこで宇宙人は地球人に大きな差をつけてしまった、はるかに高等な人類であるということがいえる。

地球人は危険

その第一の理由は、彼らはおもし地球人だったら、すぐ着陸しようとはかるのに、いっこうそうしないという点である。彼らは着陸しなくても地球の様子、物質や磁気や大気や生物や人間の文化や言語、各人の頭脳の度合や、政府のやり口まであらゆることを見通せるのである。これにはおそれいった。おまけに地球人が友好的でなくはないにしても一歩あやまればすぐ無謀なことをしでかす短気さをまでお見通しなのだ。いったいどうやってそんなことまで調べたのだらうと思うくらい。そんなことを調べていったい何をしようというのか、と思われるほど綿密に

詳細に、てぎわよくもらさず調べあげたのだ。次の頁にかえる前に、いかに地球人がおろか度し難いかという点を知らせるに、また地球人が自分たちについて述べたものであると解する方が一番さっぱりしている。次のことがいわれていた。すなわち、彼ら外部からの訪問者はいまに地球を攻撃してきて征服するであろう、と。我ら地球人はこれに備えなければ、と。そこで円盤はこの地球に人類がいて、危険であるために着陸しないのである。きっと彼らの取引は立派なものであろう。もし出来たら、彼らの取引がどんなに進歩したものであるかお目にかかりたい。でも先見の明のある宇宙人は地球の政府と相手すると、きまつてろくでもないいざこざにまきこまれるであろうことを看破しているので、その時期を延ばしている。彼らの政府には地球人の及ばぬ手ぎわ良さとチームワークとが達成されているのである。

あぶないから近寄らない

当初私は彼らが来るのは観光目的であろうと思っていた。というわけは、ジャングルの中にもしバスが入って行けて安価な料金ならば私たちは喜んで週末にアフリカやブラジルの奥地までバスツアーにゆくであろう。それと同じく危険な地球のそばを安全な宇宙機によって飛んでこられるのだから、彼らの飛来目的は観光ではなからうかと思えたのである。

この観光ということばは、地球人の意味における観光という意味と、彼らは生活をすべて楽しんでやっているから、地球の調査においてもきつとそうであろうところから、調査を楽しむという意味の観光と二つある。そこでも彼らは次のことを知っていた。地球人は危険であるため、着陸してはいけない。ここの人類に近づいてはいけない、と。そういう意味のお達しがきつとあったのではなからうか、そうでなければひょんなときにちらほらとあらわれて来るという状態の理由がつかないようである。

しかしブラザーは援助した

ところで、よく聞いてみると、彼らは調査のみならず、ある切実な理由でやって来たと言えられたのはおそろしく真実であろう。彼らの家の一部屋から火の手があがって有害な煙がただよつたので、それがどんな災わいをもたらすか、警告し、未然にこれを防ぐというものである。宇宙人の努力によって一九五〇年代からひきつづいて行なわれた爆発実験の悪影響はまぬがれることが出来たというのもおそらく真実であろう。私の頭のハゲがこの程度ですんでいるのは親愛なるブラザーのおかげであつて、もしやってくれなかつたらまるハゲになるところであつた。けれどもまアなればなつたで散髪屋に高い手間賃を払わずにすむ。冗談はさておき、あのマグロ当時の

せい惨な災厄は二度とおこしてもらいたくないというのはいつわらざるところである。

現代の新しい千夜一夜を読んでいるという実感を覚えたし、アダムスキーの傍証として力強い文献であることに満足したダニエル・フライの「ホワイトサンズ事件」は、きわめて私の気に入った内容である。これは別な太陽系から来た円盤とのことだが、金星人と同様、進歩した人類であろう。その話はかれた心をうるおし、困難につかれた胸をそっとなでおろされるような快感があった。それからフライの人柄がとても良く、物語の主人公としても申し分ない。ダニエル・フライの如き経験はやがてはこの地球のまなこある人々のつかれた胸の中に、友情と進歩のあたたかい協調をもたらさう。私は月などに行きたくないが、地球を天国にするため、こういう「ホワイトサンズ事件」に勇気づけられて、少しでも力を発揮しようと思わずにはいられない。

おかどちがい

振動率というのはその実よく分らないのだけれど、しかし何かひかれる。未知のものではあるがしかしそこに確かにあるという感じがする。このような信念は人間にとっては重要なものであって、それを逆にすると、都合の悪いこと、知っても益にならないものは当面知るべきではなく、ある種の無知によって意外に良い結果をうけることがある。こういう具

合に人は勇気づけられることが肝要であって、偉大な知力を有する人には無為は最上の幸福であるが、私も凡人は退屈だとうるくなことをしない。小人閑居して不善をなすとシナのことわざにはある。そこでわれわれはすべからくともなれば沈みがちな心を何かにつけて励ましていかねばならぬ。振動数を会得している宇宙人は恐らく退屈ということはないのじゃなからうかと思われる。宇宙旅行はわれわれが考えるほど実際には長くないとのことであるが、しかしその数日間のあいだも私は彼らは退屈しないであらうと思う。つまり、彼らは振動数を知っている。生活においては大事なことは目的ではなく、むしろその手段であり、その方法自体がよく考えられたものであれば、彼らはそこに満足を見出すにちがいない。

それから彼らには文芸とか演劇という精神的なものがある。これは地球の進歩的な文化人にとっては高く自信をもって認めているところであって、誇りに思っているわずかなもの一つである。

ところが円盤は着陸した。このこと自体が驚異である上に、彼らの進歩がまた驚異であった。生きることには困難が伴うことは必至なので、彼らの生活ばかり尊んで地球人はまるきりだめだとは私は思っていない。平和なときは、宇宙人と同じことではないか。平和なときは私が生まれて以来つづいている。それゆえまるきり地球がいけないというのでは

ないが、彼らはキリスト教という原罪までも克服してしまつたのである。ところが面白いことにパチカンは宇宙人に伝導するための宣教師を養成中だという。いわく「宇宙人でも人類にちがいないから、やはり原罪はある。われわれキリスト教徒はどこまでも布教してこの原罪から人を救い出すようつとめねばならぬ」と。そりゃおかどちがいだ。もともと宇宙人から教わつたものを、まがりなりにも守っているヒョコの伝導師が金星へ行つて何を説けるというのか？ 金星では振動数が確保されているから、それが幼児期において教育にあてられると、もう原罪から脱皮することが出来るのだ。人を見て法を説くというが、パチカンはバカだなあ。自分のお師匠さまにむかつて説法しようというのだから。教師にむかつて生徒があべこべに教えようというのだ。

ブラザーの激励を必要とする

地球人は宇宙人によって分進歩させられた。農耕の一事をとつてもそうだし、天文学や数学、文字なんか顕著なものである。そして芸術の面でも。ピラミッド、スフィンクス、彫刻、みな太古に金星円盤から降りてきた人々によって教えられたものだ。彼らの第一次の布教はこの時期で終り、それから今が第二期に入っている。この第二期たるや困難この上ないので、昔は人間の魂が浮よう時代のなごりで自由かつ達であったから容易であったのに、

今や枝葉末節の時代で魂がくさり、技術、かけひき、金がはばをきかせていて、そのほかに力はないので、ここに第二期がはじまったといっても、それは、今後一億年かかって達成されるのはじまりといえるだろう。今私がとりとめなく思うことは、ダニエル・フライの事実がわれわれに与えるおとぎ話性の重要さという点である。アラビアの夜話のように、この時期においては魂が活性をとりもどすように、ブラザーのあたたいはげましをきく必要のある時期だと思ふ。その意味で「ホワイトサンズ事件」はきわめて面白い読みものであり、確かに私はそれによつてこういう雑然たることを語るに際しても、ひょう然として深く立ち入らず、次から次へと論理の対象を変え、文章をつづつてゆく私のいいかげんさは相当なものである。私の才能は文章を書くということにあり、この文章とは現実よりも位置が低いので私にはおう悩が あった。しかしいまではそれもない。宇宙人は私のような意識もなく、純粹であり若々しいが、ちょっと無神経なところも見られる。すなわちソ連のヴォストーク1、2号に異常接近して宇宙飛行士を恐怖のどん底にたたき込んだのは、彼らが優秀な装置をもつていながら、地球人を高圧的な態度で見ているからであり、それが卒直でいいのかもしれないが、私だったらある距離以上は近づかぬところ。彼らもまた異常な好奇心には弱いものと見える。それから彼らの企図は失敗だったとあり、大編隊で飛行して地球人に彼らの存在を知らせるという企図

も、結局ショー的なものとしてどどまり、知識人の関心をひかなかつたところは彼らをはつきりさせたのである。

立派なコトバを吐かない

私がかくもいろいろなことをくだぐだと論じているのは、私がかくも低俗な人間であるから、強いて立派なことを述べようとしなから。立派なことを述べても仕方がないと自覚するからである。

ところで地上では立派なことを述べることに重点が置かれ、実行することにはあまりのり気ではない。十分な態度にあるとはいえない。けれども宇宙の意識と一体化するといった場合、この人はいつ歌うのか、この人はいつ寢床をしきのべるのか、この人はいつ歯医者へ行くのか、この人はいつスーツを買うのか、この人はいつ将棋をするのか、この人はいつ墓に行くのか、この人はいつ泣くのか、いつ映画を見るのかと、こんな風に必要な生活上のことからをつみ上げて行ったら、生活の全部はほとんど変化がないと知覚する。それゆえそんなことはやってもやらなくても同じである。地球の生活には春がきて秋になる。そのあいだに仕事をして手紙を書く微妙な精神生活がある。これもまんざら捨てたものではない。この精神生活は神韻ひょうびょうたる面を有する。すべてが有つてよい。一つのこと集中するのは避けるべきである。低俗な面が重要とはいえない

が、きつてもきり離せないのである。

ブッダの法印には論理の途中で繊細微妙な面がある。この論理の途中が尊い。言い終つたあとはどうなるかと、このときだけは尊い。そんなものである。けれどもあの論理体系は複雑多岐なので、ダニエル・フライが教わつたように、原理が得られたらこれにこしたことはない。円盤が美しいのはそれであるからだ。そこでは何から何まで単純明快であろうと思われる。それゆえ、私はくい入るようにこれを読んだ。これは貴重な体験であつた。

表面的に美しいものは中味も美しいというのが私の持論で、それゆえ、私は美しいもの、力強いもの、楽しいものをまず愛する。楽しいものは個々の平安なのであるが、ブッダの法印はそれらすべてを合わせもつていゝ。それで、ブッダの法印がよく説かれている世界にあつてはすべてが楽しい。しかしこの世界では、陰湿な個人の観照のうちのみそれは位し、なかなかよく説かれない。だから私は本当に理想的な状態はときかれたら、アダムスキーの本の中にあるといいたい。ただししまだ理解の途中にある私はアダムスキーについて論述することは遠慮する。みぞは浅くするための行動のみがとられるべきである。言うべきでないときに言つてお互いのみぞを深めることがあつてはならない。

シヤカは地球文化の代表

仏教は仏像にみられるように、重い固くるしいものではない。たとえてみれば精神的な輝きであり、原罪が消えた状態（重荷がとれた、病気がなおった）晴れやかな気持がそれに近いのである。宇宙人の言葉に、人間の住んでいる寺院という名で肉体のことを呼んでいる。その肉体を生活かつつみ、生活を自然の法則がつつんでいる。こうして同心円的にふくらんでゆく。原点にかえることを説き、実際にそれをやり、見解の正しさがよろこびによってすぐ証明されるもの、それこそがブッダの法印なのだ。

久保田殿はニューズレターの五十一号の中で、シヤカがインド滞在中の宇宙人であるとなし、日本にも来たと言っている。承服しかねるけれども、私の自信が深まったという点でさほど不利益ではない。しかし、私としてはシヤカが地球の偉人であり、地球文化の代表として誇りに思うという説をとりたのである。インドの自然と生命力がなかったらあの幸福は生まれはしなかった。ヒマラヤの壮厳とガンジスの流れ、その聖なるたずまいがなかったら聖法は生まれはしなかった。それゆえ地球は混濁つづきの苦難にみちた星ではあるが、その中で涙のきらめくような一つの聖なる教えがあるということ誇りにしたい。

困難を乗り越えよう

私は映画が好きで、昨日火曜スペースナルで音楽で

つづる名作集というのを見たが、「エデンの東」が圧巻で、「禁じられた遊び」「第三の男」「シェーン」などが印象深い。これらは映画という方法で伝えられた地球人の涙であり、苦勞して生きぬいてこの地上の生をふりかえったとき、こういう傑作が生まれるのである。私はこのことがいいとか悪いとか論じられない点で、諸法実相につうじるものだと思う。私はかつて、人が仏教に関心を向けたって生活の上にとどまることがない。ただ何もしてないとき、何かを待っているとき、こころをそこに向けている人は救われている。でない人は救われていない、それだけのことであるといいた。事実、生においては待たされることが多いのである。そのちょっとしたときに人が退屈しないならば益があったことである。人が原点にあれば待つことがあっても退屈しない。生活が一本になる。ずつつながってゆく。つまり円滑に生活できる。生活がこうして意識の流れの明確な安心のあるときは人がいちばん幸福にあるといえるのである。

フレッド・ステックリングの「なぜ空飛ぶ円盤は来るのか」の中に、テレビの番組は質が悪いので子供に見せられないとあるが、これは作品が結晶化していないためで、復しゅうを描いただけで悪いというのなら「アラビアのロレンス」も「ベン・ハー」も大作となりかねない。要はその作品が人間の経験を洗い出して魂の結晶というものを見せるかどうかであり、良いものは良いのである。

上に目を向けてその進歩を願うのなら、いたずらに愛たとか聖らかさだとかを説くべきではないだろう。私ども地球人は月旅行の経験を生かして理想的な環境をつくろうと、この地球に対する見方を変えてきた。その反面、経済的な面では策略がはばをきかせている。これは種の発展のため、試練が与えられているのである。困難を乗り越えていくところに価値ある進歩が得られるのだと私は思う。

ニューズレター第五十二号の表紙写真は疑いようのない写真の一つに加えられるべきである。というのは必要以上にはっきりと写っているからである。私の持っている本の数多い写真の中で、だいたい確実にだと思われるものが数枚ある。

1. ブラジル海軍省公認の写真
2. 南米森林調査隊飛行機の下を飛行する写真
3. フランスで車をとめて休んでいる人に向かって飛来した写真
4. サンパウロの山頂実験所で偶然とれた雪ののっかっている写真
5. ハイウェイ上空をゆく写真

この五件はあまりに明りょうに写っているためにかえって注目をひかない写真である。というのは、かすれてばやけて不明りょうに写っていればわれわれは信じるのである。ただし撮る方は私は久保田殿の撮られたような明りょうなのをとりた。その写真の趣向は日本面の神韻ひょうびょうたる中に、まぎれもない円盤を置いた型破りな画面にある。これはこれで面白いや。

生命の科学かヨガか



井上芳人

先日のあの統一会の席上及び帰る途中に、私が重成さんに話しかけた少しばかりの会話の反応から、誰かにつまらないチエをつけられているなどということとは感じておりました。その相手が藤井さんとは気がつきませんでした。多分ヨガのことだろうとは想像しておりました。

彼女は「生命の科学」を読んだ後に一夜にして消え去った霊能力に対して今もって郷愁をもっており、その上ヨガにも未練がタップリあることは知っていました。そういう彼女に、運命学上「大霊媒」になれるとか、ヨガがムー大陸時代から伝わった価値の高いものといわれたのでは、「宇宙の真理」はひと

たまりもありません。

アダムスキーは「生命の科学」の冒頭に「人間は宗教的または精神的な面を扱う際に、自己の信念の如何にかかわらず他から妨害されてはなりません」と書いています。この二人が「生命の科学」を読んでおりながら、その内容のすばらしさを理解できないということは、まだそこまで精神的に成長していないということであり、ダイヤモンドとガラス玉を見わかる能力をもっていないということになります。

魔女サイレンはどこにもいる

あなたのハガキを読みながら私は「オデッセイの冒険旅行」を思い出しました。これは今から千年ほど前、ギリシヤのホメーロスが書いたと伝えられる昔話です。その頃、オデッセイは船に乗って、トロイから故郷のイタケー島へ帰ろうというところでした。場所は地中海のどこらあたりかわからないが、大昔はこの辺一帯にいろんな怪物が住んでいたらしい。この中に半分は鳥、半分は女という女面鳥身の魔女がいて、近くを航海してゆく船に美しい声で呼びかける。するとその声を聞いた者はほればれとして思わずひき入れられ、船を岸に寄せて上がり、彼女らの餌食になるのです。

ところで、オデッセイはかねがね太陽神の娘というキルケーから、この魔女サイレンの話を知っていたので、彼は水夫たちにいつつけて、めいめい耳に

かたくろうを詰めこみ、自分の体は中央のマストに十重二十重に縛りつけさせ、どんなにもかいてもけっしてほだいてはならないと致命しました。

いよいよ船が岸辺に近づいて、魔女サイレンの歌声が波の上に伝わってくる、オデッセイはしきりに身をもがいて行きたがったが、聞こえない水夫たちは平気な顔であきれるばかり、船は無事難所を通り過ぎたということです。その後魔女サイレンたちは自分らが馬鹿にされたと思って、自殺したといわれています。余談ですが、正午だとか退け時などに鳴る汽笛をサイレンといいますが、これはこのオデッセイの話からきています。

日本では「大乘相應の地」ともいわれ、魔女サイレンに似た八百万の神々が住んでいるので、よほど注意をしなければ（オデッセイのようにマストにわが身を縛りつけなければ）自分の故郷へ帰ることはできないようです。

偉人が去れば、あとは分立する

ご承知のように大乘とは大きい乗り物つまり「すなわち大乗」という意味で、小乗とは小さい乗り物すなわち劣った教えということで、「シャカ滅後百年ほどたって、ヴェーサリーという都城の付近にいた比丘（修業僧）たちが、十カ条にわたる戒律の変更を主張したことがあった。それらは食事の時間のこととか、托鉢の作法のこととか、ごく末節的なこ

とであったなかに、ただ一つ、布施行為において貨幣の授受を認めよという重大な主張がふくまれていた。貨幣経済の急速な発展に即して、教団の律の適応を要求するものであった。長老の比丘たちは宗会議を開いて、それらの十カ条をことごとく「非律」として否決した。シャカの定めた戒律には、そのような条項はないのであった。

だがヴェーサリーの比丘たちはその決定に承服せず、さらに多数の同志を糾合して、別の宗会議を催して、長老たちとたもとを分かってしまった。それは仏教における分派のはじめであって、そのとき分立したものを大衆部と称する。初期の仏教教団における進歩派である。

いわゆる大乘仏教はその大衆部の系譜につながるものであって、その主張するところは、シャカの教法を硬直的に保持しようとする正統派（上座部）にたいする批判的見解をもって満たされていた。彼らはまず自己形成に専念すべきことを説いたシャカの教法にたいして、むしろ大衆の救済（下化衆生）を先とすべきことを主張した。それらの新しい主張のために、シャカとその弟子たちのまったく関知しない、多くの新しい經典を生産した。それがいうところの大乗仏典にほかならない（増谷文雄著「根本仏教と大乘仏教」より）のである。

明治後半よりこの方わが国の仏教学は、いつしか原始仏教の研究をその主流となすにいたって、まったくその面目を一新するにいたりました。そこでは

ながい間にわたって、もっとも低い価値しか与えられていなかった阿含部の諸経が、いまや一転して一なる地位を与えられることとなったのです。

ヨガの靈力におぼれるな

佐保田先生の書いた「ヨーガのすすめ」を読んでもみると、アダムスキーの提唱している、四つの感官をコントロールして意識と一体化させる方法によく似たことが書いてあります。「ヨーガ技法の根本は、外界の刺激に応じて、瞬間ごとに散漫に移り変わってゆく知覚器官のはたらきをおさえて、心のより深い内面のはたらきの発動を促進することにある。ヨーガということばは、元は牛や馬を車のなかにに付けることを意味したとあるから、牛や馬を拘束して、命令通りに車を引かせるという意味であろうと思われる。さらに、心の取り扱いを深く研究したラージャ・ヨーガと、体の操練によって心の世界を開くカギを探求したハタ・ヨーガ、この両面のヨーガによって、われわれは単なる健康とか健全とかいいう状態よりもさらに高い幸福を手に入れることができる」とされ、ラージャ・ヨーガではヨーガの八部門というのをかかげると、1. 禁戒 2. 勸戒 3. 座法 4. 呼吸法 5. 制感 6. 凝念 7. 静慮 8. 三昧（1と2は道徳的部門、3, 4は肉体的部門、5は肉体的・心理的部門、6, 7, 8は心理的部門）である。

制感までの準備がととのったならば、最後の心理

的な三部門の修業にとりかかることになるが、この修習によって人間のいろいろな霊能が開発されて、最後に真我が実現されて、最高の幸福である解脱が得られるとのことである。ただし、これらの霊力に夢中になってはいけないとヨーガの聖者バタンジアリはいう。この聖者のいうところによれば、これらの霊力は俗物どもにはすばらしい成功であるが、真の求道者にはつまづきとなるからである。超人間的な霊力を得て、世の俗物どもからチャホヤされ、それに夢中になっていると、解脱という真実の幸福をとりがすただけでなく、いつとはなしに高慢心とどん欲心を育てあげて、元のもくあみ、あわれむべき被縛状態に落ちこんでしまうことになる、と警告することをお忘れなかつた。というのは制感というのは単なる「外界からの印象を受けつけさせないようにする心理作業」であるからで、想念の質的向上は望み得べくもないからであろう。

インドでは宗教は必ずしも哲学ではないが、哲学は必ず宗教であった。高度な宗教といえはそれは哲学であったのである。仏教もまたこういふ哲学・宗教という形の宗教の一つである。そこで哲学のつく理論を生きた真理に変えてゆく技術が必要になる。ヨーガは真理を単なる概念知から、個人の血となり肉となつて、そのあり方そのものを改造し、その真の自我を解放するところの真知にまで高める方法、技術なのである」としていますが、技術偏重におちいる危険性を多分にもっているようです。

個人的真理ではダメ

真理を概念知から真知にまで高めるには、宇宙の法則を探究して、それを常に応用することです。「人間が持ち運びできるものは、本人が学びとつて応用した宇宙の法則の記憶だけである」とアダムスキーはいつています。また彼は真理には二種類あると次のように書いております。

「すなわち宇宙的な真理と個人的な真理です。たいの人はエゴを喜ばせる自分だけの個人的真理によって生きています。だからこそ種々の真理が存在するわけです。宇宙的な真理のもとに生きている人はごく少数です。個人的真理を捨てて宇宙的真理のもとへ帰るのは容易なことではありません。人間はながい間つちかわれた個人的な習慣を持っているからです。しかし、われわれがもつて生まれた『宇宙的な目的』を遂行するためには、以上のことがなされねばなりません。個人的なものはいっさい『宇宙の家』に入ることはできません。しかし個人は宇宙と融合することによって一体となることはできます。これはエゴの救出といつてよいでしょう」

マタイ伝には「生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見出すものは少ない。滅びにいたる門は大きく、その路は広く、これより入るものは多い。なんじは私に従つて狭き門より入れ」とさしめしめています。

次にアダムスキーの「宇宙哲学」の十七「古代の知恵が現代の進歩か」と題するところを紹介しよう。

「人間の心には、過去をたたえることによって、大きな満足を見出すらしい奇妙な特性がある。東洋人は祖先を崇拜することによってその特性をあらわし、西洋人はすでになくなってしまつた偉大さをなつかしんで常に英雄崇拜を続けてきた。多分それは過去のものもろの事実を、時がやわらけて、各人の想像による多彩な情景だけが残されているからだろう。またどこに存在しようとも遠方にある野原は一段と青々と見えるのだろう。

多くの宗教団体などの間で、われわれは古代人の偉大な知恵についてずいぶん聞かされている。『もしあなたがすばらしい活動状態にまで自分を高めたいと思えば、古代にかえつて古代人の教えを研究してみなければならぬ』という。これは少々ゆがめられた言葉ではあるまいか。進化するために古代にかならねばならないとは！

進化とは拡張であり、成長である。樹木は成長してゆくうちに元の根になるだろうか？ そんなことになれば、その果実を決して味わうことはできないだろう」

ヒマラヤの奥地に住んでいるといわれる聖者たちはヨーガ行などやつていないことを付言しておきましよう。



UFO研究と科学的態度

清水畑 博

近年になって宇宙に目を向ける人の数は急速にふえつづけており、一方、UFOに関心を持つ人も徐々にではありますが、そうなりつつあります。

私達の日本GAPもますます快調に発展しつつあり、意気盛んな今日この頃です。

さて本題にもどり、科学的態度について、まことに軽薄な頭しかもっていないにもかかわらず無知知恵をしぼりだして考えていきたいと思えます。

科学的態度とは

科学的態度というのはまさに読んで字のごとしというわけで、科学に基づいた態度ということです。あるいは科学の精神に基づいた態度といってもよいかと思えます。

この問題はUFOの研究やGAP哲学を研究している私達にとってはどうしてもさけてとおることができないものですし、GAP会員諸氏たらずとも、日常生活の上できわめて重要な意義があると思われれます。

ところがこの科学的態度というのは、質問されてみると案外首をひねる方々が多いといわなければなりません。わかったようでわからないのが特徴だと思えます。日常において、よくあの考えは科学的だとか非科学的だとか、あれこそまさに科学的態度だ、とよくいいます。しかしながら、なぜそのように思うのか、と聞かれても、ただなんとなくという答が

多いようで、まさに非科学的な答といわなければなりません。

こんな有様ですからどうしても一度入念に考えてみる必要があります。GAPの会員であるならば、なおさらのことです。というのはGAP哲学を研究する際、文章の随所に「何々しなければならぬ」とか「何々こそ人間のとるべき態度である」と書かれてあるわけですが、ただなんとなくわかったような感じになって毎日何々しなければならぬと口ずさんでみたり、人間のあるべき姿は心意識と肉体の調和であるという事実を暗記するだけで、これらを理解しようと考えたことはどのくらいあったでしょうか。単にこれらの文章を暗記しているだけでは何の役にも立ちません。

もう一言つけ加えるなら、想念観察についてですが、代表が聞きあきるほどやれやれといわれても、毎日事務的に、今日は一日楽しかったとか一日中愉快だったと手帳に記入するだけでは何の進歩もありません。一応自分の想念パターンを知るのには役立ちますが、ただそれだけではだめで、自分のこうした低想念をどうしたら消去できるか、また高想念をどうしたらより長く維持できるかなどと自分で考えて実行しなければなりません。日本GAPは単なるUFOマニアや想念観察愛好会ではないのです。まさにGAP哲学という、時代を先取りした哲学の研究団体なのです。

従いまして、それを研究する態度やもの考え方は

や日常生活にいかに応用するか、といったことを十分に考えていかなければ研究の成果は十分に発露されないのです。これは何もGAP哲学だけに限らず、学校での学習や本を読んで理解しようとする場合にもいえることです。極言すれば日常におけるすべてにいえると思います。

最近日本では百科辞典を洋室などに飾っておくのが流行しているようですが、これなどもまことによい例で、いかにも教養ある人間だと見せかけようとしているのだと思いますが、とんだお笑い草です。飾っておいても使わなければ身につかないのです。つい先頃、約二百年前にはカントとかニュートンとかレオナルド・ダ・ビンチのような、今でいうならノーベル賞クラスの人々がすばらしい業績をあげていたわけですが、カントを例にとるなら彼は薄っぺらなわずか数十冊の本しか持っていないませんでした、そのうち直接彼に役立った本は数冊ぐらいいいものでしょう。レオナルド・ダ・ビンチなどもよい例で、彼はこうしたい、ああしたいという考えやヒントをノートに書いて、それを基礎に広い分野にわたってすばらしい業績を上げ得たのです。ですから私達もたかが三冊（宇宙哲学、生命の科学、テレパシー）といわずに一生懸命がんばれば、相当の成果が得られるはずですから、今すぐにも実行することが大切です。

さてそれではあらためて科学的態度とは何かというわけですが、多分に私個人の独善的な考えがはい

りますが、おそらく次のとおりだと思います。

「物事を客観的、かつ論理的に考えて、そのなりたちや相互の関係を解明してゆく精神的な態度」

日本語は英語とちがって似たような単語が多いので、もっとよい表現のしかたがあるかと思っています。

一応右の文でよいのではないかと思います。客観的とは何かとか、論理的とは何かといろいろ疑問があたりで、わかったようなわからないようなあいまいな感じがするかもしれません。私は先ほど、あいまいなことは何がわかって何がわからないかはっきり区別することだと書きましたので、右を暗記するのではなく、自分なりに考えてみる必要があります。さて、科学的態度はまさにGAP哲学そのものといってもよく、また、GAP哲学を研究する際に必要な態度といってもよいと思うのです。

原因と結果の法則を知る

数百年前から科学はたゆまなく進歩して今や科学なしでは生活できないといえるほど生活に密接な関係をもつようになりましたが、過去の発明や発見や理論体系の構築などという体験によって科学者は一つの断固たるゆるぎない事実を知ることになりました。それはすなわち原因と結果ということです。いかなる事にもこれが成り立つわけで、正しい筋道を通れば必ず成果が得られるということを意味しています。なにもアダムスキー氏が始めて唱えたわけ

ではないのです。

化学に例をとればよくわかると思いますが、自然には気まぐれというものはなく、現象の背後には必ず原因がひそんでいると私は経験的に知っていたのです。



例をあげましたが、常にこれが成り立つわけで、何か変なものができるといふことは絶対にあり得ないのです。このことから、自然界には人間の理解をはるかに越えた宇宙の法則があるにちがいないという考えを呼び起こし、かくて幾多の研究が行なわれて今日に至っているのです。

「例1」を実際にやってみようにならなかつたならば、そこには必ず理由が存在します。それは一つであるかもしれませんが、多くあるかもしれません。この事実から一つの事柄にも幾つかの原因がひそんでいるということがわかりますから、実験にしろ調査にしろ、しかるべきデータを得るには、それを混乱させる要素をできるだけ取り除かなければならないことがわかります。しかしながら宇宙の法則といったものを完全に理解しているのでなければ、全部取り除くというわけにもゆきませんから、考え得るできるだけ多くの要素を取り除いて何度も実験や調査をくり返すわけです。出てきたデータはそれぞれにみな異なりますが、実験の精度を増すにつれて、そのバラツキは小さくなり、その法則性がしだいに表面化してきます。スペースブラザーズならともか

く私達が実験をした場合には、得られたグラフが完全に直線とか放物線になることはありません。しかし何百回、何千回と同じ実験をさまざまな条件のもとでくり返してゆくと、ついにはそこに何らかの法則性があることを認めます。それが公式になるわけです。しかし現実には教えきれないほどの要素が相互に私達の理解を越えて影響をおよぼしあっているのです。公式から導かれた数値がそのままあらわれることはめったにないことです。とはいってもすぐには信じられないと思いますので、その例をあげることにします。

△例2 √ 定規で目の前にある机の幅を計るとします。日常では別にどうということはないのですが、仮に正確に計ることにすれば大変なことになります。考慮に入れなければならない要素を思いつくままにあげてみると次のようになります。

1. 空気の温度、2. 定規の周囲の空気の温度、3. 机の周囲の空気の温度、熱源としては4. 人間、5. ケイ光燈あるいは電燈、6. 人間の肺から出された空気、7. 「4.」と定規の距離、8. 「5.」と定規の距離、9. 「6.」が「1.」に与える影響、10. 空気の熱伝導率、11. 空気の熱膨張率、12. 定規を手持っているなら指の温度、13. 定規の表面の温度、14. 騒音によって生じる机や定規の温度上昇、15. 定規の内部の温度、16. 定規の線膨張率、17. 定規の熱伝導率、18. 定規は何度のとき正しい目盛になるようにつくられているか、19.

机の表面の温度分布（温度計が十度を示しているても机の表面がすべて十度なわけではない。日があたっているとところは熱くなるし、日陰は冷たくなっている。そうでなくてもでばらばらである。20. 机の内部の温度、21. 机の熱伝導率、22. 机の熱膨張率、23. 机の測定する面は完全な平面か、24. 定規の目盛はルーベで見ると線ではなく面だとわかるか、さてそれではそのどこが三十センチというのを示しているか、25. 仮にその真中だとしても、真中とはどうやって定めるのか、26. ここまでの要素が解決されたとしても机の端の定義は何か、27. 机の端をルーベで見ると凹凸があるが、どこを端とするか、28. 電子顕微鏡で凹凸の一つを見ると原子が一つ一つ見えるが、やはりこのレベルでも凹凸があるわけで、はたまた端とはどこか、29. さらに原子一個の端とは何か等々。

とりあえず二十九種類の要素だけをあげました。もし厳密に計ろうとするなら、これらの一つ一つをまたもや厳密に計ってから行なわなければならないのですし、測定する機械自体をも正確に調整しなければなりません。しかも要素はこれだけではないのです。もし物理学者や化学者を集めて探させますと、おそろしいほどたくさん発見できるはずですし、時間の変化によって全要素が刻々と変化するわけですから、ある瞬間の全要素がわかっただとしても次の瞬間にはどうなるか予測できません。ですから答は次のようにならなければなりません。

「一九七三年八月一日午後二時七分三十一秒三八五七二三四・・・に全要素を計測した上で機の長さの測つたら、一、三〇二七八四五・・・メートルであった。この間のあらゆる測定には全く時間がかからなかったのである」

右の例からよくわかるとおり、あらゆる要素を考慮するのは不可能ですから、どうにもならないことは誤差として有効数字を出すことになりまます。また、いつでもこんなことをしていたのでは話ができませんから、実用上さしつかえない程度にとどめておくわけです。これがいわゆる科学的態度の一つです。

ですから右のことを知らないで、万物には原因と結果があるなどしたり顔でわかつたふりをするのは典型的な非科学的態度ということがわかります。またこんなこともわかります。「これこれのデータは百パーセント信頼できるのです」これも非科学的態度で、そのデータもマユツバもので信頼できません。私達はUFOの研究もやっているわけですが、このようなことは日常茶飯事のようにしばしば起こりますから、細心の注意が必要だと声を大にしていっておかなければなりません。

次の問題が解けるか

人間はとかくセンスマインドだけで行動しやすいのですから、右がよい例になったと思います。では一つ問題を出しましょう。理工系の大学生の

正解率がわずか数パーセントしかなかったの、習慣にとらわれているかどうかを判定するのによい問題だと思えます。なお答はあとに書いてありますから、先に見ないようにして下さい。

地球の赤道は約四万キロメートルである。また半径は約六千三百キロメートルである。

今、地球の表面の凹凸を完全に均一ならぬめらかな面にしたとする。このとき地球の全表面は約四千メートルの厚さの海水におおわれるので、月から見ると水球に見えることになる。

さて、海水がまったく波立たないとして、まったくのびちぢみのしない糸を赤道の周囲に一回巻きつけた。もちろんその長さは約四万キロメートルであるが、さらに十メートルの長さの同じ糸を付け足して同じように輪をつくった。後の方の糸は十メートル程長くなったので、当然ながら地球の表面(海面)から何ミリメートルか離れることとなった。

さて、それでは一体何ミリメートル離れたか？ 答とともにその理由も述べよ。

答を見て以外な感じがしたかも知れません。おそらく正解率は数パーセントだったでしょう。人数にすると十名以下でしょうね。

さて、それではなぜがったのでしょうか。そのわけは、みな「何ミリメートル」というのと、習慣あるいは常識というものにだまされたのです。各自が考えた理由は次のとおりだと思われまます。

1.糸の長さが四万キロメートルもあるの、たかが十メートルふえても大勢に影響はない。

2.何となく。

3.キロメートルとメートルの単位を混同した。

4.こじつけのような独善的な計算から。

5.何ミリメートルかとあるのだから、それらしく答えてみよう。

6.その他変な考え。

半径と周囲の式を知らなければ答えようがありませんが、あてずっぽうで答えるのは非科学的です。また、この式を知っていながら考えもせずに答えたのはなお悪い態度です。何事もよく考えてから判断するのが科学的態度というものです。

ここまでで何となく科学的態度というもののアウトラインがつかめてきたと思います。

ところで今日までは科学的態度とは何かということとを説明する学問の分野はありませんでした。ただ何となく個々の研究者が自分なりに考えてきたようなわけで、近年になって社会状況の変化から、これと同様な科学哲学とか方法論とか、科学者のあるべき姿を問題にするようになってきたのです。現在は科学何とかという類の単語がたくさんあり、単に科学者とは何かというふうな、ごく基礎的な定義さえも千差万別で、アメリカでは軍事研究にたざざわる研究者のことが科学者であるという定義さえもあるくらいですから、いわんや他の科学何とかという単語についての混乱はおして計るべしということにな

ましよう。

かくのごとき状態ですから、私の考えが的をはずれているかもしれませんが、先に進むことにします。

科学的・具体的態度

先ほど科学的態度を簡単に説明しましたが、その具体的な態度は何かということはまだ述べていませんでした。そこでこれまでの例やいろいろな人考えた事柄を箇条書にしてみます。

△科学的態度と思われること▽

1. 常に現象の背後に何がひそんでいるかを考える。
2. 名譽や地位や肩書やフライドのようなものは無視する。誠実であること。
3. できるだけたくさんさんの情報を集める。
4. 活動の計画をたてる。
5. 忍耐強いこと。
6. 権威や過去の理論を盲信せずに、自分の納得のいくデータや理論を思考の基礎とする。
7. 注意深い。
8. 物事を客観的にとらえ、感情をできるだけおさえる。
9. 自分が今何をしているかを把握しなから活動する。
10. 常に向上しようとする。そのために自分よりレベルの高い人に接しようとする。

11. 日頃からいろんな知識を吸収する。

12. 考えや研究が独創的である。

13. 研究中にも何かもつとよい方法はないかと四六時中考えている。

14. 冷静である。

15. データや方法を何度も吟味する。

16. 過去の習慣や社会通念を極力排除する。

17. 物事を納得のいくまで行なう。

18. 公平に考える。たとえ自分がそのために迷惑しても、この態度を堅持する。

19. あせったりあわてたりしない。

20. 急いで事を運ばずに、多少遅れても正確を期するようにする。

21. 人や物事を差別しない。

22. 徹底的に一つの事柄を何日も何か月もわかるまで考える。

23. 考えれば考えるほどよい方法が見つかることを知っている。

24. すぐに結論を出すようなことをしない。

25. 物事にはいろいろな性格があるので、いろんな角度から考える。できれば全部の角度から考える。

26. 人の考えたことを尊重する。だが参考程度にとどめる。

27. 自分一人であらゆる面を見落しのないように考えるのは無理だと認識する。自分の思考力の限

28. 界を認める。

29. 常に反省する。

30. 自分の欠点を改めるようにする。他人から欠点を指摘されたらその線にそって考えてみる。

31. いかなる場合も盲信というのは避けるべきである。

32. あらゆる物事には原因と結果があるということ

33. を認識する。

34. 日頃の努力が長い年月の間には大きなものになるということを知っている。

35. 自分の考えを他人に強制しない。

36. 物の考え方には、論理的なものや感情的なものなどいろいろある。

37. できるだけ早く物事のアウトラインを知ろうと努める。なぜなら、そうすれば以後の活動が計画的かつ能率的に行なうことができるからである。

38. できるだけレベルの低いものからは遠ざかるようにする。

39. あらゆる事柄が思考力の増大に役立つので、専門にとらわれずにいろいろ考えてみる。

40. 知識や思考力が増すほど問題の核心に近づきやすいということを知っている。

41. 他人を非難しない。

42. 他人を非難しない。

43. 他人を非難しない。

44. 他人を非難しない。

45. 他人を非難しない。

46. 他人を非難しない。

47. 他人を非難しない。

48. 他人を非難しない。

49. 他人を非難しない。

50. 他人を非難しない。

51. 他人を非難しない。

52. 他人を非難しない。

53. 他人を非難しない。

54. 他人を非難しない。

55. 他人を非難しない。

56. 他人を非難しない。

いろいろ考えつくと思えますが、第二十七項目に従うことにします。また二十三項目のようなこともありますので、考えたい方には勝手に考えていただくことにしまして、一応、科学的態度というものの性格はおわかりになったのではないかと思います。ここにおいて科学的態度はGAP哲学と同一だといえるわけ、相異点はいえ、GAP哲学ではどこにアイデアが出るかという間に答えることができるのに、科学的態度はまったく答えることができないという大きな事実と、科学的態度というのは単にかくあらねばならないというスローガンのかたまりみたいなもので、なぜそうなのかと問われますと、はなはだ苦しい立場に立たされる次第です。明らかにGAP哲学の方が優秀です。

ですが、GAP哲学を日常の生活に應用する際には必然的に科学的態度をとっていることになり、また逆のことにもなるわけで、単に應用するといってもいきなりあらゆる事を一気にやれるわけでもないのですから、やはり一つ一つ身につけてゆくようにしなければなりません。

私の場合を例にとりますと、GAP哲学をあらゆる事柄の基礎にして、その上で右の四十項目のうちいくつかをその場では何も認識していないにもかかわらず自然に行なっているのです。つまり先の四十項目のうちいくつかが身につけているわけで、自然にそうなるのです。とはいいますが、GAP哲学を理解したなどという気は毛頭ございませぬの

で、いつも失敗ばかりしている次第ですから、とても自慢できるわけはありません。

良い事をどしどし應用しよう

いずれにしてもよいことはどしどし取り入れるべきで、こういったことは日頃からクセをつけるように心がけねば身につけませんから、最初のうちはいつも頭に文章を浮かべたり口ずさんだりして慣れるのがよいと思います。

これは従来何の気なしに行なってきた習慣を新しく、よりすばらしい習慣に変えることを意味しますから、大いにやる意義があるわけで、もし仮にそのようにして一年たったときには、昨年の自分と今の自分の差がはつきりわかるはずで、学生の方なら最もよくご理解いただけると思います。たとえば昨年は短い英文ですら読むのに苦勞したのに今では長い英文もすらすらわかる、といった具合です。また趣味の場合にもいえることです。十年前も今も何ら差異が認められないとすれば、現状維持ということになり、私達が日常生活においているんな事件にあってたり、いろんな変化があったりすれば、当然のことながら、考えたり行動したりしてきたわけですから、必然的に成長していることになるはずで、現状維持という現象はきわめて異様な現象といわねばなりません。以上も科学的な考えの一つですね。

科学的な態度は日常においてもUFO研究のよう

な場合においても非常に重要です。具体的に頭をどう使うかということですから、こういったことを把握しないで習慣や目の前で起こったことに即座に影響されているようではどうにもなりません。

さらにいくつかの例をあげて、先の項目のうちいくつかを説明してゆきたいと思えます。

例3 Vあるデパートで衣服の五千円均一大特売をやっているところです。店員もはでに着飾ってメガホンを手に持って、今買わなければ一生の損だといって買い気をおおき、一方客の方も押しあいへしあいつて必死の形相で買いあさっています。

こういったことはよくある光景ですが、ここで非科学的な態度の人は何かを考えるいとまもなく、われもわれもその中に飛び込んで買い始めます。ところが科学的な態度の人はこの光景を見ていったん冷静に観察して考えてみます。つまり買い得か、安からう悪からうか、同じ物で他の売場にもっとよいものはないか、他のデパートでもっと安く売っていないか、またデパート側はなぜこんなことをするのか、と。それから結論を出します。買うのを控えるか、他の売場を探しまわったり別なデパートにはいつてみたりして買うかです。また別に必要でなければ、買わなくてもよいことになりませぬ。

例4 V車やテレビやステレオにしても同じことがいえます。せっかく買ったのに全然使わなかったり借金に追われたり、特にテレビについていうと、毎日ボケーとつまらない番組を見ているようでは、テ

レビからでてくるX線や紫外線で目を極度に疲れさせるばかりでなく、思考力も大きく低下させます。というのは、テレビの画面を見たり音を聞いていると自然に態度が受身になるからです。与えられた低俗な概念でその場限りの楽しみを味わい、あるいは退屈をしのいでいるのではまことになげかわしい限りです。しかも画面がすぐ変わるのでだいたいち考えのひまがありませんし、変化についてゆくためには前にはいつてきた概念を考えずに捨てなければなりません。前の第二十三項目の逆のことですが、一度に必要かつ十分なアイデアが出てくるのではなく、それは時間をかけることによって徐々に得られるのですから、せっかく入手できた概念を考えもせず捨ててしまうのでは非科学的どころか、何のために頭を持っているかわけがわからなくなりそうです。

△例5 V教室で教師がニートンの万有引力について説明しています。(月例会で久保田先生がGAP哲学を講義している場合も同様です)

非科学的生徒と科学的生徒

非科学的な生徒は、公式の形を暗記し、先生が語った説明だけを覚えようとしています。そして家に帰ってから参考書に書いてあることを暗記してしまします。つまり、結局覚えたのは公式の形と教師と参考書の説明だけであって、自分で考えようとはしなかったのです。万有引力の公式に限らず、すべての公

式には使用する限度というものがありますし、仮に万有引力の公式を完全に説明した場合、五、六ページですむわけにはいきません。彼はそのごく一部だけを知っているわけで、自分なりに考えて理解したのではないのですから、人に説明するときは先生が話したことや参考書に書いてあることしか話すことができません。よって質問されると困り果てるだけですし、みずから精神的な成長の機会をのがしたことになりす。

一方、科学的な態度の生徒は、公式というのはそこに用いられているいくつかの定数や変数の間にだけ成り立つ関係を示しているのであると覚えていまずし、他のすべての因子はこの公式にまったく影響を与えないという前提のもとに成り立っており、おのずとその限界もあるのだ、とも知っています。しかも公式の説明の際には相手の理解の程度に応じて行なわれているという事実も知っていますから、先生が説明したことを基に、より深い理解を得ようといういろいろ考えてみます。そして自分が理解できた点、わからない点、あいまいな点を明らかにしてゆき、どうしてもわからない点は先生に質問したり文献を読んだりして着実に自分のものにしてゆきます。もちろん考えの深さというものにはおのずと限界が存在するのは事実ですが、常にこのようにより深い理解を得ようと努力することによって、理解が深まり、思考力や視野も拡大されるわけです。たとえ現時点での速度がのろくて苦しいにしても、長い目で見る

と確実な一歩になり、将来が約束されることになると思います。

この例のごとく私達もGAP哲学を研究する際にはこのような態度をとることが望ましく、できればGAP哲学だけでなく、日常のあらゆる事柄に応用すべきだと思えます。

別に深刻に考える必要はなく、どうせ短時間だけ考えたのでは出てくるアイデアに限りがありますから、二つのことを何日もあるいは何カ月も断続的に考えるようにしたらよいと思います。レオナルド・ダ・ビンチのように、自分の考えたことやアイデアなどを日記帳とかアイデアノートなどにでもちょっと書いておくこと意外に成果があがります。退屈だと思ったら、そのノートを読めばまたすぐに思考の素材が得られますし、ずっと前に書いたことを読みながら、あの頃はまるでおろかだったのに今はなんて優秀になったんだろうと感心したり、全然変わらないなあと落胆してみたり、とにかくいろいろな意味でおもしろいのではないかと思います。

ここで参考までに万有引力について簡単に述べておきましょう。

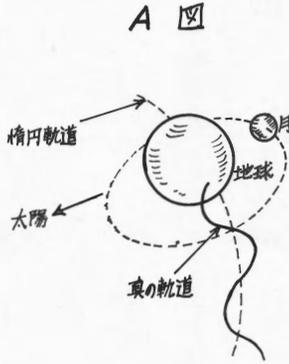
$$\text{公式 } F = G \frac{m_1 m_2}{r^2}$$

m_1, m_2 は物体の質量、 r は距離、 G は定数、 F は発生する力

自然界に存在するすべての物質の間には相互に引力が働く。その力の大きさは両者の質量の積に比例し、距離の二乗に反比例する。もっと具体的にいう

と、人間や本やペンなどお互いに引っ張りあっているということ。しかしながらその力は非常に弱いので、惑星や衛星というきわめて大きな物でなければその存在はわからないのです。

太陽や月と地球の場合にはこの力が働いているのがわかります。毎日一、二度起こる満潮や干潮です。普通、月が地球の周囲をまわっているといいますが、本当は両者がジャイロスコープのように共通重心の周囲をともにまわっていることとなります。ですから地球の軌道は正確な円形ではなく、ダ行しているわけで、地球は約十四日ごと太陽に近づいたり遠ざかったりしていることとなります。(A図)



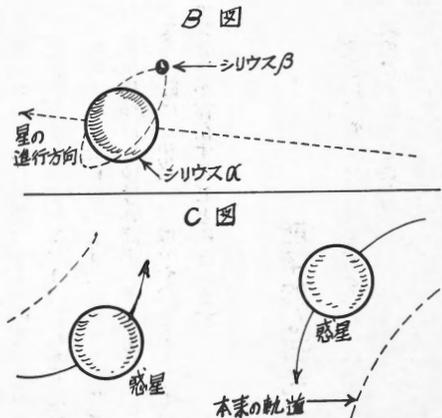
同じようなことは連星や惑星同士にもいえることです。星空で二番目に明るいシリウスは(一番明るいのは太陽)シリウスα(主星)の周囲をシリウス

β(伴星)がまわっており、何十年も観測を続けますとやっとわかります(B図)。惑星同士でも互いに近づくと本来の軌道よりずっと近づき合います(C図)。

この公式の限界は惑星と衛星の場合に存在し、これはロッシュの限定といわれています。衛星の軌道がある一定の値以下になると、あるいは近づきすぎると、衛星は粉々になってしまいます。火星の内側の方の衛星は、この値ぎりぎり、真円の軌道を持っています。しかしながら、惑星と宇宙船という極端に質量が異なる場合には、この限界は存在しません。

他人に対しても科学的態度が必要

さて、自分の知識を他人に伝えてやる場合も科学的な態度というのが存在すると思います。つまり授けてやるのか教えてやるのかという押しつけがましい態度はとるべきではなく、単に伝達してやるだけにすべきだと思います。というのは、その知識をどうするかは受け取った側の自由で、参考にするか、全部信ずるか、無視するかは本人の勝手です。そこで伝える場合には相手の理解を越えない程度に内容のレベルを定めて、主観を加えないように注意深く検討した上で伝えるべきです。最近の公害裁判で御用学者がでたらめなデータを発表したりしたものです。これがよい例で、どういうわけか数字がたくさ



んならばと、いかにも信頼できるデータに思えてくるから不思議なものです。

また、情報のレベルを調整するだけでなく、必要以上に多くのデータを伝えてやるのもある意味で有害なものとなり得ます。案外、自分の欠点を指摘されると落胆したり怒ったりする人が多いのですが、このような人なんかは欠点を何十個もまとめて知らせてやりますと大変なことになりますね。

地球人はセンスマインドだけが成長しているようで、私達が地球に住んでいるのも当然のことながらしるべき理由があることになり、各自がなおいっそうの努力をされることを期待してやまないものです。科学的態度についていくつかの例と私個人の考えを付け加え

て述べてきましたが、必ずしもこれにこだわることなく、単なる参考にして、みずからの考えをまとめていただきたいものです。これも科学的態度の一つですね。やはり自分の言語にしてみないことには十分な理解が得られたとはいいがたいように思われま

考えるとは何を意味するか

さて本稿もいよいよ終りに近づきました。最後に補足のようなことを考えてみたいと思います。今まで「考える」という動詞がひんばんに出てきましたが、一体考えるというのは何を意味するのでしょうか。ここに至ってついに「考える」ということを考えてみたいと思います。何か変な表現のようですが、しかたがありません。

普通よく「考える」とよいアイデアがでてきますね。たまたま特にそれがすばらしいとインスピレーションとかカンといえます。そして考えるときは一生懸命考えるというより、頭や体をリラックスさせて楽しく考えたほうがよりアイデアが浮かんできます。

私は右のような明白な事実から「考える」ということは、考える対象に関する想念を感受することだと思えます。

ですから思考力、つまりそのような想念をいかにたくさん得やすいか、という状態がより強くなれば

なるほどたくさんのお念を感受できることになりま

す。ここにかいてインスピレーションとかカンは別に不思議なものではないということがおわかりになったと思えます。

さて思考力が十分に強いといかなることも即座にわかることになりませんが、実際には無理なことですから、考えてゆく過程でそれを助けるもの、つまり思考方法があったほうが考えやすいということになります。

考える方法、つまり物の考え方とか創造工学や水

平思考、垂直思考など、こういつたものは近年、一九六〇年代後半から急に盛んになってきました。学者の興味の対象が変わったのではなく、産業界の必要から生じてきた問題で、近ごろの卒業者は与えられた仕事は完ぺきにやるのだが、研究をさせようとしても何をテーマに選んだらよいかわからないとか、研究の方法がはつきりつかめていないので金と時間を使うばかりでロクなものがない、という事態がその主な原因だったのです。今の教育や大学教授や産業界の質にも問題があるわけですが、それに気がつかない本人も悪いので、百科辞典みたいな知識と専門分野がマージャンだとすればどうにもなりません。

さて、思考方法というのは絶対的なものがあるわけではなく、各自が自分に合った方法を見いだせばよいのですから、平均的なことを紹介したいと思えます。

普通、科学者や研究者といわれている人達は、活動の多くを情報のしゅう集にわりあてています。それは全体の時間の約六十パーセント以上ですが、その次が、思考とか構想を練る時間で、こういったことが討論とか雑用を含めて約三十パーセントで、残りの十パーセント以下の時間が実験とか調査とか観測ということになります。天文学者の場合は特にひどく、観測の準備に三カ月以上をついやし、観測はせいぜい数時間です。日本では岡山天体物理観測所の東洋一の百八十八センチの天体望遠鏡を使うことになりませんが、観測というのは、わずか二十センチ四方程度の乾板に星の写真をとる作業であるのが普通で、雨が降ったり目的の星が雲にかくれて見えな

いとなると、また何カ月か順番を待つことになりま

す。運よく観測できると一時間ぐらい気長に乾板を露出させてから、それを現像します。乾板にはシミのような星がいくつ

能率的な研究法

か写されており、これを基にまた何カ月か考えることになりま

す。その場その場で最善の方法を見つけてゆければよいのですが、そうはいっても実際には相当に困難です。ですから能率的な研究方法が存在することになります。

その方法とは、常に科学的態度を失わないようにして、次のようにやることです。

1. 目標を定めずに情報を集める。
2. この種々雑多な情報の中からおもしろそうなものをいくつか探し出す。
3. これらのいくつかのテーマに属する情報をかき集める。
4. 情報がある程度集まったら、それぞれについて研究の意義があるか、どの程度の成果が得られるか、必要な資料を持っているか、何か月かかるか、などとくわしく検討します。そして一番気に入ったものをテーマとし、他は没にします。全部没になったら再度「1」からやりなおさなければなりません。
5. テーマについてのいろいろな情報を集めます。国会図書館や日本科学技術情報センターを利用するとやりやすい。
6. 集まった情報からさまざまなグラフや図表を作って、そのアウトラインを把握する。
7. 図表やグラフやアウトラインがわかったら、さらにこまかく目標を定める。
8. やつとやるべきことがわかったのですから、実験の方法を考える。なるべく短時間に、手間がかからないように、また金がかからないような方法を考える。
9. 実験をする。何回も実験方法を改良してデータが信頼できる程の精度になるまで何度も実験する。データがいいかげんだと、どういうわけか自信がわいてこないので、実験が不十分だった

10. データが出たら理論の裏付けをしたりグラフや図表を作ってレポートを作成する。
 11. 何度も考えなおしてレポートをより完全なものに仕上げる。
 12. レポートを提出したり発表したりする。
- 一応、右のようになります。「2」から「4」までがいうなればカギで、ここで実験不可能なことや、だれでもやれそうなことを選べばバカをみることになり、自分にやれそうで成果が期待できるものが多いこととなります。最近では公害の分野が特に期待できるようで、GAP的なことではテレパシーの実験や信念とは何か、といった論文が概当するでしょう。
- 近ごろの卒業者がさっぱりだめな理由は「1」から「4」までが全然なっていないからでしょう。日頃からこうした経験をふんでいないとなかなかできるものはありませんから、大学生という自由時間の多い時期に、マージャンをやる時間をちょっとへらして、その分で右の練習をしなければならぬと思います。何事もアウトラインを把握できない間は、やたらとむずかしく感じるようですが、何もハンドブックのような断片的な数値をいちいちおぼえなくても、やり方さえおぼえていれば、データをさほど知らなくても、それほど苦労せずにやれるはずですよ。マージャン学生に限らず因果応報というのは事実の

ようですね。

さて今までに述べたことで十分に科学的態度をこ理解願えたと思います。こうしてみると何らむずかしいことはなく、どちらかといえば簡単な部類にはあります。しかしこういった定義とかたてまえだけをいくらくわしく述べても話しあっても、つまるところ自分の身につけて日常生活なり仕事なりに実際に生かさなければ何の役にも立ちませんし、身をもって科学的に行動できなければ本当に理解したことになりません。そんなわけですから各自が実行されて、大きな成果をあげられることを心から望むのです。

おすすめしたい本

- | | | |
|------------------------|----------|--------|
| 研 究 人 間 | ノルチング | 共立出版 |
| 科学の精神 | 萩原明男 | 八五〇円 |
| 歴史における科学 | I P バナール | 一 二〇〇円 |
| 自然科学概論 | 1, 2, 3. | みずが書房 |
| 宇宙人応答せよ | シクロフスキー | 三〇〇〇円 |
| | | けい草書房 |
| | | 千円前後 |
| その他、日本理学書総目録に多数載っています。 | | 東京図書 |
| | | 五〇〇円 |

光の子と闇の子のたたかい

久保田八郎

ジョージ・アダムスキの「生命の科学」を読んでみますと、最も重要と思われる箇所として次のような節が目につきます。

1. 「この大なる英知と共に働くに際して友星人が用いる方法は、心のかわりに自己の意識でもって万物を観察することにあります。わかりやすくいえば、彼らは観察される個体があたかも自分であるかのようにその個体について意識的になるのです」(五十七頁)

2. 「ゆえに或る意味ではわれわれ人間は半分メクラなのであって、つまり人生の半分だけしか生きていないのです。イエスは知っている。

『死者に死者を葬らしめよ』と。これは死体を運ぶ棺の付添人は死体と同様に死んでいるという意味です。棺の中の死体は生命にたいして無意識のまま横たわっていますが、それを運ぶ人たちも実は「宇宙の生命」にたいして完全に無意識なのです」(九十三頁)

右のうち1.は万物を見る際にすべては自分の姿が反映したものと観ずることをいい、2.は生ける人間も「宇宙の意識」に気づかぬ限り死人と同様だということの意味しています。これらをまとめますと、地球人というの一種の迷妄の世界の中を何のあてもなく泳ぎまわっている魚みたいなもので、他の魚と衝突した瞬間だけ初めてその個体の存在を知るにすぎず、通りすぎればまたあてのない浮動を続けるようなものだという意味になります。このような状態になった根本的理由の一つは人間の生涯がただ一回きりで、死んだら自分のすべてが消滅するという考え方にあると思われれます。これを是正するのは容易ではありませんが、科学がもっと進歩して転生の実態が科学的に実証されるようになれば、人間の思想に飛躍的な向上が見られるようになるでしょう。

しかし科学によらなくても直感的に転生の事実を知っている人がありますし、身近な現実の世界においても物事の結果を直感的に予知する人

もいますから、科学的実証はなくても人間は直感力の増大によって万象の実態をある程度は感知することができるわけで、ここに一つの活路が見出されることとなります。コンピュータその他の科学的機械類の驚くべき性能を決して無視することはできませんが、個人の身にせまった危機を事前に探知する装置はまだ開発されていませんし、だいたい、人間の運命を予知する機械の発明はおそらく不可能でしょう。運命というのは四次元世界で描かれた青写真が展開するものと考えられるからです。この四次元世界と関連のある唯一のものは人間の想念であるということにまず間違いはありません。実にこの「想念」が青写真を描いて運命の源泉となるのであって、これ以外の何か他のものが一個人の運命を決定するのでないことは多数の聖賢の教えによらなくても自己の簡単な行動上の結果から帰納的に推理してもわかることです。

想念によって青写真が描かれて一つの運命が展開してゆくとすれば、それを感知するものは想念発生器官を兼ねる受信器官でなければなりません。どんなに高感度なラジオ受信機でもこればかりは不可能です。これをいいかえますと、個人の運命を作るものは本人そのものであり、自己の運命の結末を感知するのも本人自身であるということになります。たまにすばらしい超能力者がいて、他人の運命を予知することもありますが、危険をのがれるか予定のコースどおりに巻き込まれるかは本人次第です。たとい超能力者のアドバースによって一時的に危険をのがれても結局本人は自分で作ったカルマを果たしたことになります、いずれは自分で清算しなければならぬ時がきます。したがってやたらと超能力者に頼るのはよくないのであって、何といっても自分自身が超能力者になることが先決問題です。このためにこそテレパシー、透視力等の超感覚力の開発が必要なのであり、その方法を教えたアダムスキーの哲学書が

重視されるわけです。

「今」という瞬間の重要性

「他人は信用できない」という言葉が一般化していますが、この真の意味は「他人のセンス、マインドは信用できない」ということなのであって、ソウルマインドまで信用できないではありません。しかし一般人はセンス、マインドを人間の实体とみていますから、これが変化すればたちまち相手に失望します。これは両者とも誤っているのであって、メクソスがハナクソを笑うたぐい입니다。つまりAがBを非難する場合、Aのセンス、マインドがBのセンス、マインドを非難しているにすぎません。いいかえればこの地球上ではそれほどにセンス、マインドに頼りきっているというわけで、これでは天国のような世界の表現はほど遠いことになります。

なぜある人々は墜落する運命にある飛行機に乗るのか、なぜある人々は大火災が発生する運命にあるホテルに宿泊するのか。この世には安全な飛行機やホテルは沢山あるのに、なぜよりによってそのような危険な運命にあるものに引きよせられるのか。これは本人が過去に描いた青写真どおりに現象の世界で具体化するのですが、宇宙の意識と一体化して予感力を発達させれば「行くな」という内奥の意識からくる声を聞きとることができて、その青写真を消滅させることが可能になります。これはカルマの修正です。したがって人間は絶対的な宿命によってがんじがらめに縛られているわけではなく、向上の機会はいつでも与えられています。「いつでも」というのは「今」という瞬間を重視することを意味するのであり、三十年後、五十年後ではありません。「今」という瞬間に自分は大変化をとげようと決意してそのように自己訓練を開始するな

らば、そのときから新たに宇宙的な前進コースの青写真が描かれて、それが現象の世界に展開してきます。本人が設定した輝かしいカルマを果たす道が開かれてくるのです。こうした積極的な変化をとげないでいてある日突然にテレパシクな超能力が身につくことはあり得ません。やはり想念印象の観察、他の個体との一体化の練習、その他の自己訓練をたえまなく行なうことによって次第に感知力が開発されるのです。論戦などの言葉の遊戯に終始しているだけでは百年河清を待つことにならざるだけでしょう。

知識と感性とは別

アダムスキーの哲学の要諦は「内部からくるインスピレーションに従って生きよ」に尽きます。インスピレーションといえは普通「靈感」というような意味にとられて、心霊的なものと感違いされやすいのですが、ここでいうインスピレーションとは「内奥の意識から洩らされる指令」というほどの意味であって、心霊とは関係ありません。要するに直感によって誤りのないスムーズな生活をしなから他人を助けて、この世界に住みよい社会にしようというわけで、そのためには万事を知っている内部の意識に頼り、意識からくる情報に従おうということの意味します。

大体に人間は精神的に進歩すればするほど直感力が向上するのであって、きわめて豊富な語イをもちながらもテレパシクな感受力がなければ、結局は語イをもたない人と実質的に異なりません。自分の行動の結果を正確に予知できず、やはり迷いに満ちているからです。ここにおいて知識と感性とは別物であることがわかります。もちろん知識はなくてよいという意味ではありません。ただ従来の人間の生き方が知識本位

であって、感受力の開発に主体をおいていない点を指摘したにすぎません。

自分自身とのたたかい

インスピレーションが泉の如くたえずわき起こって失敗のない生活ができるようになればどんなにすばらしいことでしょう。これは決して不可能事ではありません。そのような人が現実存在するからには、万人にその可能性が潜在しています。必要なのは、必ず可能になるといふ鉄のような信念とすさまじい忍耐力を基盤にした自己訓練です。忍耐とはオケラ道徳だという人がありますが、私の経験によれば貧弱な語学力を身につけるだけでも数十年にわたる相当な忍耐力を要したことを思えば、一般人の思いもよらぬ超能力的感知力を開発するのが生やさしくはないことがわかります。

そうなると一つのたたかいは始まります。光の子（ソウルマインド）と闇の子（センスマインド）とのたたかいです。怠惰なセンスマインドを何とかしてソウルマインドのもとへつれもどそうとするたたかいであり、これは自分自身とのたたかいかでもあります。もちろん公害その他の社会悪を是正するための具体的活動も必要ですが、これがセンスマインドから出る感情的な行動になっては、かえって悪しきカルマを作ることになり、悪循環をくり返すことになります。その場合にいかなる行動に出るかは内部の意識からもたらされる知恵に従うことが大切です。

一体にこの世では何をやっても生やさしくはありません。他人からの援助だけを頼りにしては失望をまねくだけです。むしろ他に対する援助の方向に動いてこそ救いがあります。

質問と回答

問 私は現在大学にかよっていますが、アダムスキー氏の深遠な哲学に触れてから学校の授業がいやになり、勉強をするのがばからしくなってきた感じがすみません。これについて意見を聞かせて下さい。(一学生)

答 今までこれに類した質問を何度も受けましたが、その場合私の答はきまっています。「学問を無視してはいけません。通学できる経済的余裕があるのなら勉強を続けなさい」地球では種々の複雑なシステムにより、何かの職を得て働かなければ生活できない仕組みになっています。いくら高度な思想を身につけても働かないでジツとしていけば、しょせんメシが食えません。その意味でもなるべく高度な知識と技術を身につけることが必要で、そうでないと就職しても職場で役に立たないことになり、対社会的な奉仕活動を行なうのも不十分になり、成果があまりません。特技をもたぬ何もできないドンキホーテにならないことが肝要です。私がささやかながらも多年GAP活動を続けてこられたのは、会員の方々のご援助は別として、基本的には語学その他の勉強を猛烈にやったからであり、また本誌のような本来ならば高い費用のかかる高級なオフセット印刷物をわりに費用をかけないで刊行できるのも私のみならず和文タイプライターを操作してオフセットの版下(はんした)を作るからです。つまり私は翻訳者とタイプピストと版下製作職人をおかねて本誌を作っているのです。タイプ打ちの技術などはまったくの独習によるものですが、このささやかな技術がGAP活動で絶大な役割を果たしています。ですからせっかく学校へ行ける恵まれた環境にあるのなら、しっかりと勉強して専門家になることを心がけて下さい。まず大地に足を着けた上で

の宇宙哲学であって、この世界を生き抜く力をもたないで深遠な思想ばかりに熱中してはじまりません。特に若いうちは猛勉強を続けるべきだと思えます。大いにがんばって下さい。

問 私は半年ばかり宇宙哲学の勉強を続けていますが、どうも意味がわからないのか、これまでどおりと変化がないように思います。また想念観察の意味もよくわからず、実行ができません。それでもなぜかアダムスキー氏の著書を読まねばおられない衝動にかられます。何とかしてこれらすべてを理解して実行したいのですが、よい方法を教えてください。

また、想念観察をすれば狂人になるという人がありますが、ほんとうにそうなるのでしょうか。(三重県 河合清美氏ほか)

答 アダムスキーの哲学(哲学というより法則と呼ぶ方が適切ですが)を実行する際に根本的に重要なのは、万物一体感を腹の底から感じるように自分の目につくあらゆる物を自分の肉体の一部分であるかのように見る訓練をすることにあります。生物、無生物を問わず、およそ物体を存在せしめているのは宇宙の意識ですから、すべての物は本来分離しておらず、「意識」によってつながっています。このことをたゞ頭の先だけで考えないで、腹の底からフィーリング(感覚)でもって感じるように自己訓練をします。あせらないで、ときどき分離感が起こっても失望することなく忍耐強く訓練すれば、いつかパッと目が覚めて、あらゆる物に対して何ともいえない親近感がわき起こる時がきます。その瞬間こそフィーリングによって一体性を感じた瞬間です。これを持続させますとインスピレーションがわき起こり始めて、自分の内部に大きな変化が発生しつづけることがわかります。

想念観察は良きカルマを作るためにも非常に重要な方法です。つまり分裂感情(憎悪、怒り、悲しみ、失望等)をハリでついたほど起こさ

ないようにたえず自分の想念印象を監視するのです。そのためには小型ノートを常時携帯して、宇宙的想念と非宇宙的想念（エゴ）の二種類に大別し、自分の心中にわき起こる想念をかたっぱしから記録していつ、それを分析と反省の資料にするのです。このようにして記録をとらないと進歩はむづかしく、ただ漠然と人間は神の子なのだと考えているだけでは発達は望めません。決して楽な方法ではありませんが、現実の人生がきびしいのと同様に、こうした精神的自己訓練にもきびしさが要求されるのであって、それに耐える力が必要です。

想念観察をやれば気違いになるとか自分を一定の状態に縛りつけることになるという人もありますが、これは完全に理解を誤っています。ヴントやジェームズらによる初期の内観心理学もやはり想念の観察から出発しており、これがあらゆる心理学の基盤をなしています。むしろ想念観察法を知らない、または心理学のシの字も知らない一般人がセンスマインドによる何かの概念にとらわれて自分を縛りつけているのであって、だからこそだれもが「自由」に対する憧憬をもつのであり、それゆえに「解脱」を求めようとするのです。しかし一般人は自由になれません。なぜか？ それはテレパシクな感受力をもたないからです。したがって「一寸先は闇」という盲目の状態で不安なままに生きています。たとえば動物——特にネズミ、小鳥、ウナギなどは大地震を事前に感知する予知能力をもっています。少数の特殊な人を除いて一般人はこんな能力をもちませんので、みづから悪しきカルマを作って大災害に巻き込まれたりします。これこそ自縄自縛でなくて何でしょう。

しかし地球上の人間全体が一種の狂った状態にあるとよく識者がいったりします。これはセンスマインドだけで生きているからにはかなりまっせん。そのセンスマインドによる生き方が正常だと思ひ込んでいれば、

有史以来あまり多くの人が試みなかったと思われる想念観察という方法はひどく困難に思えて、少しでも続けられわすらわしくて気が狂ったような状態になるでしょうから（そういう報告もあります）、想念観察は人間を狂人にするとも考えるのも無理からぬことです。これはちょうど鋭敏な感覚をもつ野性の動物を人間が家で飼いならすと次第に能力を失い、あとで原野へもどされると狂った状態になるのと同様です。

ですからセンスマインドに安易な生き方だけを選ばせている人の言説にまどわされしないで、偉大な哲人の真理の言葉だけを読み、雑音に耳をかたむけることなく自己訓練を続けることが大切です。言葉で語られたことを言葉でけなすのはだれにもできることで、三文の価値もあり、まっせん。だれにも容易にできないことをみずから実行してこそ価値があり、そして報われるのです。鉄のような強固な意志をもって続けて下さい。

近い将来世界的な大変動が発生して大部分の人類が死滅するけれども、目覚めている人は事前にスペースブラザーズから内盤や母船によって救出されるという情報があります。これについては？（一会員）

答 この場合の大変動というのは諸大陸の沈下などを意味するものと解してのことですが、局地的な大地震、大洪水などは起こるかもしれないが、大部分の人類が死滅するほどの大変動が遠からず発生するとは考えられません。しかも万人に対して公平なはずのスペースブラザーズが一部の人だけを救出して他を見殺しにするとは「自分たちのいうことを聞く者は助けてやるが、聞かない者は勝手にしろ」という地球人のエゴヒイキと同じことになり、何のことはない地球式センスマインドを一步も出ないことになり、世の終滅説は昔からあったことで、めずらしくはありません。人間の恐怖心を巧みに利用したニセ情報に注意する必要があります。

ジョージ・アダムスキーの思い出



デスモンド・レズリー

の大ホラ吹き。2.最も風変わりなバカ。3.エリヤ以来の最大の重要な人物の一人(注IIエリヤは旧約聖書の「列王紀」に出てくる紀元前九世紀のヘブライの大予言者)。

円盤騒ぎが起こってから十二年になる今日(この記事は一九六五年に書かれた)、いまだに議論の的になる人物がただ一人いる。どう見てもこれほどの「関心」「激しい怒り」「徹底的な支持」「憎悪」などをひき起こしたコンタクティーは他にいない。しかしこの事はたぶん大衆にとって益となっていないはずである。とにかく大衆に何かを考えさせたのだ

から!

この驚くべき人間と十二年にわたる親しい交際を続けた今でも私は一九五四年にカリフォルニアで彼と最初に会ったとき以上にさほど利口になっていない。私とジョージの共著の書物が浮世の人間どもを仰天させてから一年後である。彼は間違いなく次の三つの一つとして後世に残るだろう。1.古今未曾有

ジョージは激しい人である。たて続けに数時間も話すので、彼のいっていることは事実なのだろうと思うようになる。するとまたたきもしないで彼はきわめて激しい、がまんならないようなことをいい出すので、聞き手はそんなことまでいわずに去って行くのに行き。そして彼に失望して去って行く。するとたぶん数週間、または数日、数カ月たってから彼のいったことは真実なのだという確信をもつようになる。例をあげよう。教皇ヨハネ二十三世が死ぬ一、二日前に彼はローマからロンドンに到着した。私は空港で彼を迎えた。その日は聖霊降臨祭の前日の土曜日であったと思う。そこからまっすぐにステインズにある私の小型巡遊船へ車で案内した。その船で一族の数名の者が週末をすごしていたのである。彼はうれしそうに、旅行について一切を私たちに話してくれた。すると何かのはずみで例の黄金のメダルの話が出たので、ついにジョージは語り始めた(注IIアダムスキーがローマ教皇から与えられたといういわくつきのもの)。「これは黄金のメダルで、私以外のだれもこれをもちあうことはできないのだ」といって、表面に教皇ヨハネ二十三世の肖像を彫り込んだきわめて優美な小

型の黄金のメダルを取り出した。後に私が調べたところによると、それまでだれにも譲り渡されたことのないメダルである。「どのようにしてそれを入手したのか？」と尋ねると「教皇が昨日私にくれたのだ」と答えた。当時教皇は死にかかっていた、長いあいだだれにも会っていないことを知っていた私は、むしろジョージと対立した。そこで彼はそのときの様子を語り続けた。

バチカン宮殿内のナゾ

彼は宇宙人の指示に従って、バチカン宮殿へ到着し、すぐに中へ案内され、法衣を与えられて教皇のマクラもとへ導かれた。その場で彼は宇宙人から渡されていた密封した包み物を教皇に手渡した。受け取った教皇の顔は明るく輝き、「これこそ私が待ち望んでいた物だ」といった。ついで教皇はこのきわめて特殊なメダルを与え、謁見は終わった。

さて、ジョージをバチカンへつれて行ったのはルウ・ツインシュターク女史——あの信頼できるルウであった（注||スイスGAPリダーで、ヨーロッパの女流円盤研究者として有名な人。英、独、仏、伊の各国語に熟達したルウがこのとき通訳としてアダムスキーに同行した）。それで私は彼女に照会してみたのである。その返事によると、二人はバチカン宮殿へ行ったが、私用出入口へ近づいたとき、首に紫色の布をつけた一人の男が現われた。ジョージ

は叫んだ。「あの人だ！」これに迎えられて中へ導かれた。

二、三十分してからジョージは一九五二年に砂漠で行なわれたコンタクトの直後に目撃者たちが述べているのと同様の興奮と狂喜の状態でふたたび姿を現わした。彼はすっかり宇宙人になっていて、突然としているルウに告げた。「彼に会った！彼に会った！」

彼が謁見の模様をルウに話した程度の内容は私も聞いている。まさかただのひやかしでバチカン宮殿へはいり込み、高位の人に迎えられるとはルウにも考えられぬという。彼は宮殿内にいるあいだにたしかにすばらしい体験をもったのである。（注||この点については大体同じ内容の書簡をルウが編者宛によこしたことがあるし、フライイング・ソーサー・レビュー誌にも発表された。いずれ本誌に再録の予定）

後に私が大修道院長に例のメダルについて話したら、院長はおたまたま、そんなものは最も特殊な事情のある人でないと与えられるはずはなく、自分の知る限りではそれをもたらした人はまだいないという。私の大きな疑惑にもかかわらず、どうやらジョージはヨハネ二十三世の死の二日前に会ったらしい。そして教皇に封をした包みを渡したようである。

その包みの中に何がはいっていたのかと尋ねたら、自分は知らないとい彼は答えた。それはヨーロッパへ出発する前にスペース・ブラザーズから与えられたもので、「教皇にそれを渡しなさい。そのためのあ

らゆる手配はバチカン宮殿内でのとらえられるはずだ」と申し渡されたという。どうもブラザーズは他のあらゆる場所と同様、この宮殿内にも「第五列」（注||スペイン内乱で活動したフランコ將軍側のスパイ部隊。ここでは冗談でいったもの）を潜入させているらしい！

ジョージの話によると、その包みの中には公会議に対する指示と、助言がはいっていたのではないかといい。後のその会議の議題、すなわちキリスト教徒の統合、ユダヤ人憎悪の解消、その他教会の維持に必要な常識的な処置を考えてみると、その包みには必要には次のような文句が書かれたメッセージがはいっていたものと思われる。「それをやり通せ。さもなくば去れ」これはもっといいいな言葉で述べてあったのだろうか——。

アダムスキーの欠点？

以上はいかにもジョージらしい。だが、これ以上もはや彼の話を信ずることはできないと決めると、彼は後になって結局は支持されるような話をもち出してしまってくる。

私はまた一九五四年に彼といっしょにいたときを思い出す。そのとき彼はバンアレン帯（注||當時は未発見）について残らず話してくれた。地球の表面から数千マイル離れた彼方にある輝くはん点である。その後この帯のうち二つは発見された。三番目は未

発見だが、宇宙飛行士が月にむかって出発したときに発見されるだろう。

ジョージの欠点の一つは、報告の仕方がきわめて下手だということである。彼は目で見たままの記憶をもたないし、物事や場所の記述はかなり混乱している。これについては、かつて私と彼がいっしょに旅行したときの模様を彼が第三者に話して聞かせる際に調べたことがある。どうやら大きさ、日時、形色などは彼にさほどの印象を与えないらしい。ゆえに、たしかに彼の円盤旅行の体験記には遺憾な点が多い。だからといって彼の体験記が真実ではないというのではない。ただ彼は目で見える物を言葉で表現するのが困難なのだ。(注||一説によればアダムスキーは真相のすべてを公表できないために、体験談のときはかなりボカしながら話したといわれている)彼がほんとうに打ち込むと抽象的、精神文化的な話題がはるかに得意である。たぶん彼が真に打ち込んで語るのを聞いた人はいないだろう。それはまったく経験によって得たものである。講演の際には彼は神経質となり熱狂的となる。彼は疲れやすく、極度に精神力に頼ろうとする。しかし一人きりになってゆっくり休養するとまったく別人のようになる。声はより深く、より美しくなり、その内部で神なる「意識」が呼吸を始めたかのようにほとんど人格の転換が行なわれるのである。こうした瞬間こそ私にとっては忘れがたく銘記すべきときなのである。

ジョージは世界を豊かにする

ジョージについていえば、彼が出現したことは世界が豊かになることであり、彼が去れば世界が貧しくなると私は思う。驚くべき情報を伝えて人々の目を初めて実際に寛まさせたのは実に彼である。しかも彼は長い年月と批判のテストに耐えてきた。この地球と他の惑星の兄弟たちとの一体化が実現するとき、ジョージ・アダムスキーの名は敬愛と名譽とのなかに残るだろう。

個人的にいうと私はジョージ・アダムスキーの友人であることを残念に思うことは決してないだろう。

円盤研究界のあらゆる人々のなかでジョージ・アダムスキーは唯一の最も議論的になる人物として存在している。他の多数の人が惑星人とコンタクトしたと称し、それらが寛容でもって認められたり信じられたり、おもしろそうな軽べつの目で見られたりしてきたが、悪口、賞賛、驚嘆のアラシをひき起こすにはジョージはただ口を開きさえすればよかった。

アダムスキーの知られざる面

他の人と同じほどに私は彼についてよく知るようになったと思う。数度彼とともにすごして一般にほ

んど知られていない隠れた面を発見した。話好きで、はでな、むしろ荒っぽい外面の奥には偉大な人間性がひそんでいたのである。彼の性質のなかにある或る種の気まぐれ性はこの偉大さを隠すのにしばしば骨折ったし、むしろ真実の彼よりもはるかに浅薄な人間という一般向けの顔を見せていた。

彼はいかなる人物であったのか？

たしかに尋常な人間ではない。肉体的にはポロンド人、少しばかりジプシーの血が流れていたと思う。きわめて強健で、男ぶりがよく、燃えるような黒い目をもっている。精神的には一個人どころではなかった。公開講演を行なう際のジョージを私は最もきらった。彼は聴衆の前では話が下手だった。神経質で、混乱して、一挙に多くを語ろうとした。彼にとつて群集は魅惑的だったが、しかしそれを恐れた。演壇にいる彼しか見ない人は失望して去って行ったにちがいない。

すると今度はくつろいだ気ままなジョージが出現する。こぎれいな顔のわりにするどい目をして、はたの澄まし屋をギョッとさせては来目な喜びにひたたりする世間なみの飲み手のジョージである。

最後には別なジョージが出現する。美しい表情の、賢明な、親切な、自己の任務の重要さを深く認識したジョージである。このときのジョージの中に「主」が現われるのを私は数度ちらりと見た。その後ふたたびカーテンがおろされて浮世の容ぼうが彼をおおひ隠すのをいつも残念に思った。

なぜ彼は選ばれたか

私はしばしば彼が円盤問題の主役として選ばれねばならなかった理由を考えてみた。彼は自分が教えを伝えるためのカルミックな(宿命的な)理由によって別な惑星から生まれかわってきたのだとみずから信じていた。この考えはまったく妥当であると思う。彼はまた世界の偉人たちも惑星人とコンタクトし、同じ使命を与えられたのだけれども、種々の個人的理由によってそれをこぼんだか、またはうまくゆかなかつたのだと考えていた。その選ばれた人々がとても出席できないと弁明したあとで王の宴会に招待された。"ちんば、びっこ、めくら"として自分をみなしていた。彼は自分を一本の折れたアシ(注||植物)と感じていたが、ああ、しかしこれは喜んで"彼ら(ブラザーズ)"の調べを歌おうとした唯一のアシである。それゆえ全力をつくし、立派な英語を書いたり話したりする力のないことや、講演の困難さ、彼の本来の人となりのままにあらうとするものの生来の困難さなどにかかわらず、精いっぱいメッセージを伝えようとして非難や悪口にも屈することはなかったのである。

これはまことにもっともなことと思われる。惑星人の側で賢明な処置がとられたにしてもだ。一人の偉大な尊敬にあたいする人物を選び出してそれを認めることはだれしも容易であらうが、落第して狂人

のラク印を押されるかもしれないような人物が選出されるならば、本人がその妥当性を認めるのはきわめて困難であらう。ふたたびいうと、ジョージ・アダムスキーの中にはこの地球のあらゆる徳性と欠点とが存在していた。それゆえ人は彼の中に自己の姿を認めることができようし、もっと個人的な基盤から判断することもできるだろう。

彼の体験の主張の妥当性を評価することは依然として困難である。個人的には私は彼の円盤写真や初期のコンタクトなどはまぎれもなく真実であり、いつか後続の事件類によって証明されるものと思ひ、心から満足している。彼の主張のなかには容易に信じられないものがあるにはある。しかし人が彼を夢想家としてかたづけられることにすると、彼の主張に正当さを与えようとして何かが現われてくる。

遠隔操縦円盤が出現

私がパロマーですごしていた日々夜の二度の機会を思い出す。私は小さな黄金色の遠隔操縦円盤が急速に離れて行くのを見たのだ。二度目のときは日没後まもなく内庭で話し合っていたのだが、そのとき私はだれかから観察されているという強烈な感じが起こってきた。あたりを見まわしたとたん、折しも一個の小さな黄金色の円盤がせいぜい五十フィート彼方を光の尾をひきながら矢のように上昇するのが見えた。ジョージは笑った。私はいった。「しめ

た。この二十分間われわれはワイ談はやらなかったぞ」

彼は私をコンタクトにつれて行くことを拒絶した。当時それは私をいららさせたが、後になって、そのような体験をもつのに私の精神状態は適していなかったことに気づいた。もし私が円盤に乗ったとしても、きわめてすぐれたコンタクティーになり得たかどうかは疑わしいのである。私のエゴはしきりに自分を傲慢にしたがるからだ。実際のコンタクトをした人々は妙な方向にそれしてしまった。新しい宗教を始めたが、実際惑星人が望んでいないことを次々とやっている。私もその例に洩れなかったことだろう。

驚くべきバースマーク

ジョージについて私が好きだったことは、彼がこの上なく徹底していたことである。彼は高慢さや、悪口、心身の過労、その他多くの物事にまったく無頓着であったと思う。それどころか信奉者のあいだで紛争が生じて、あのような壮大華麗な計画のなかにあつていつも大いなる謙虚さと自身の"とるにたらぬ存在"感をもっていた。

こんなことを述べても彼は私をどがめはしないだろう。彼はすばらしかつた肉体を脱ぎ捨てたからだ。かつて彼は私に最も驚くべきバースマークを見せてくれたことがある(注||バースマークとは出生時か

ら肉体に印されている特殊なアザまたは痕跡。それは彼のヘソだった。これこそ普通人のヘソとはまるで異なるものであった。それは太陽の形をした巨大な円盤型で、周囲に深く刻まれた光線状のスジを放ち、各スジが十五センチもあって腰やマタのあたりまで伸びていた。これが何を意味するのか私にはわからない。まさしく「太陽の子」のシルンだったのではないだろうか。

彼と知り合った人はだれも彼を心から敬愛するようになつた。私と彼との最初の出合いは奇妙なものであった。二人の共著「空飛ぶ円盤実見記」の内、私が書いた部分ほどの出版社からも刊行を拒絶されていた。その当時発生したジョージの砂漠における金星人との最初のコンタクトについて一週間後に私は一友人から聞いたのである（注Ⅱこの友人とは超心理研究家のミード・レイン博士）。そこでただちにジョージ宛に手紙を出して、彼が撮影した円盤写真を見せてもらいたいこと、できれば私の円盤の著書に載せるためにそれを買いたいことなどを知らせてやった。すると彼は一組の円盤写真を送ってくれて、金はいらぬからそれを使用してよろしいという返事を添えてよこしたのである。「何という並はずれた人間だろう」と私は思った。最大の価値ある写真を撮りながら金を要求しないのだ。後になつて原稿を送ってくれて、出版社はいずれ見つかるだろうと謙虚に書きそえてあった。その頃までには親しかったウェイヴニー・ガーヴァン（注Ⅱ元英国G A

Pリーダーで、後に「フライング・ソーサー・レビュー」誌の編集顧問となり、他界した）が私の原稿を認めてくれていて、もしこちらでジョージの写真や体験の大意を私の原稿中に利用しただけなら彼の原稿が生きないことになるだろうと心配していた。そして十分に吟味してから、共著にしてはどうかとすすめてきた。そこでそのことをジョージに通知したのだが、彼はこちらの手紙をまだ受け取らないのに打電してきた。「共著でよろし」ここで実にテレパシーが働いたのである！ こうして急速に関係が深まってきた。その後直接彼に会ったとき、まるで過去世において非常に親しかったかのように私たち二人は昔なじみの友達になつていた。彼の忠実な友で秘書のアリス・ウェルズも驚くべき婦人であった。彼女には別段何も尋ねる必要はなかった。本人がちゃんと心得ていたからだ。こちらの想念をキャッチして事前に回答してくれたのである。

宇宙人ジョージはまたやってくる

かつてこの地球上で生きたことのある多数の発達した人々が、この苦難の時代に地球を援助するため円盤や生まれかわりなどによって地球へ帰つて来つつあるとジョージはいつていた。ジョージもその人々の一人として、自称インテリや生意気な奴らや物知り顔をしたがる人間どもを狼狽させるために選ばれたということはまず間違いあるまい。これはち

ょうど、理性の力がまさって自身の精神という通路をふさいでしまった人々よりも、過去の偉大な予言者たちがきわめて純粹で謙虚な出生をしたがために真理を伝えるのによき乗物となつたのと同様である。われわれはジョージの逝去を惜しむ。心から惜しむのであるが、しかし私は彼の他界を悲しみはしない。彼は仕事に全力をつくした。世界は彼の他界によって変化するだろう。彼の出現は世界が豊かになることであり、去って行けば貧しくなるのだ。しかし私は彼が永遠に姿を消したのだとは信じない。別な惑星で生まれかわつたならばふたたび地球へ帰ってきてわれわれとコンタクトするつもりだと彼は生前に約束していた。

ジョージ・アダムスキーに関してはまた何かが起こるだろう。いや、いつも起こっているのだ。

さらば、なつかしい宇宙人ジョージよ、安らかに行きたまえ！

改訳—空飛ぶ円盤同乗記—(6)



ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

● 土星の母船 第8章

私がこれから述べようとする内容はかなり複雑である。この土星の母船に乗船後に私が見たほとんどの機械設備は私にとってまったく新奇なものであった。最初はそれらの機能が十分に理解できなかったが、後になってある程度の理解をするように援助されたのである。

私たちが停止した地点のかたわらにあるプラットフォーム（プラットフォームといっても実際には約十五メートル四方の磁気エレベーターであることがわかった）は、深さ六十メートルまたはそれ以上もある巨大なシャフト（縦坑）を通してこの大母船の底部から頂上部まで人間と貨物を運ぶのである。一本の磁気柱がエレベーターの中心を貫通してこのシャフトの長さいっぱい直立しており、これがエレベーターを運転する動力を提供していることがわかった。

円盤から降りて私をまず驚嘆させたのは、このエレベーターと上方に伸びている巨大なシャフトである。前方には手すりのついた一種のブリッジがあるが、これはわれわれの円盤が停止したデッキエレベーターのプラットフォームを連結させるのである。つまり十五メートルのプラットフォームはシャフトの幅よりも少し小さいのだ。

ズールといっしょに歩きながら私はふりかえって周囲を見た。そしてこの巨大な母船の威厳と見事な構造に圧倒されたのである。うしろをふ

りかえって見ると、われわれの円盤のむこうに、一同が通り抜けて下降してきた広大な室の天井が高くそびえているのを見ることができた。上方へ伸びている大きな二本のレールがこの天井をつき抜けて、エアロックがあったと思われる場所よりも上方のデッキのどこかに続いている。私はたった今通り抜けてきたばかりの母船の入口の方をまっすぐに見上げることができた。

プラットフォームに着いたとき、ファーンコンがエレベーターのシャフトをのぞき込めようがす。のぞいてみると上方と下方にそれぞれ三層のデッキがあるのが見えた。合計七層になるわけだ。各デッキには、プラットフォームのふちとデッキとのあいだのすき間をびったりとおぎなうために、ブリッジ（またはバルコニーの延長みたいなもの）がシャフトの中へつき出ている。あとでわかったのだが、これらのつき出た部分はね橋のようにはねあがるのである。この各ブリッジの長さは上下の各デッキ間の高さと同じであるから、それがはねあがるとデッキの入口をふさぐことになり、更にシャフトのなめらかな側壁となつて、どこからもしれないように完全に閉じてしまうのである。エレベーターのプラットフォームが目的の場所へ着くと、側壁になつていたこの部分が下方へたれて、またつき出たバルコニーになる。そうなるとエレベーター上の手すりが外がわへすべり出て、バルコニー用の手すりとなる。エレベーターが動くときはこの手すりがバルコニーからもどつてきて、ふたたびエレベーターの安全手すりになるのである。

円盤から出た直後に私はこの手すりが動く様子を見た。われわれがバルコニーをわたつてエレベーターに乗り移るとすぐに、まだ上昇しないうちからうしろで手すりがわれわれをとりかこんだ。こまかい点までくまなく見とどげようと見まわしていると、ズールがエレベーターの床か

ら約十センチ高くなっている小さなコントロールパネルのそばで立ちどまった。どうやら私がうっかりその上に足をのせるのを防ごうとしたらしい。このパネルは長さ約七十五センチ、幅は十五ないし二十センチある。その表面には足で容易に操作できるように二列にたがいちがいにならんだ六個のボタンがある。各ボタンには使用目的をあらわしたマークがついているが、私には判読できない。

ズールがボタンの一つを踏んだ。するとただちにプラットフォームの前がわの手すりが外へゆるやかにつき出て、一同が今着いたばかりのシャフトの反対がわ壁面のバルコニーつき出し部分の手すりに早がわりしてしまった。同時に、われわれの前の壁にある美しく均整のとれた装飾のほどこしてあるドアがすべるように開いて、新たなすばらしい光景が眼前に展開した。

一同は今や優雅をきわめたサロンの中にはいった。これは金星の母船内のサロンと家具やデザインの点で似ているが、この方が少し広い。ここもやはり光源の不明なあの神秘的なやわらかい光で美しく照らされている。しかし私の目はすぐに六人の男と六人の女性にひきつけられた。どうやら私たちの到着を待っていたらしい。彼らはかたまつてすわりながら互いに話し合っていた。私たちがはいるとみんなは立ち上がって微笑した。一人の男と一人の女性がすすみ出て私に挨拶し、初めて会ったのに私をあたたく仲間に入れてくれた。

婦人たちはまるで生きもののように思われる材質でできた美しい薄地のガウンを着ている。みんなが見たところ衣装の一部と思われる幅広いベルトをしめているが、これには宝石が飾つてある。これは私が今まで地球のいかなる宝石にも見たことのないようなやわらかさと生気で輝いている。

この宝石つきのベルトが他の世界の婦人たちの服装のただ一つの装飾品である。この宝石類に目をみはりながら、それらが地球の宝石よりもすぐれているのだというよりもむしろ、そのすばらしい光輝は着用者の輝きから発するのであるまいかと考えてみた。そしてその考えは後にファーンコンによって確認された。

婦人たちのガウンは手首まである長いそでがついている。ネックラインは円型であった。服の色は各自の好みによって異なるけれども、みんなやわらかいパステル調で、それが一同全体を調和した魅力あるものにしていった。

彼女らの身長は約一メートル五十センチ足らずから約一メートル七センチまでである。みんながすらりとして美しい体をしている。顔つきは優美で輪郭は美しい。肌色はほんのりとしたバラ色を帯びた色白の皮膚から、やわらかいなめらかなオリブ色に至るまで、あらゆる色をしている。耳は小さくて、線のきれいなマユの下に表情に富んだ大きな目があった。全員の口は普通の大きさと、自然の赤味を帯びた唇のように見えるが、皮膚の色に応じてさまざまである。

みんなが髪を肩まで垂らし、ゆったりと、しかも魅力ある型に編んでいる。男女全員がサンダルをはいている。婦人たちのだれもが二十才そこそこに見えないが、あとでファーンコンが語ったところによると、彼女らの年齢は三十才から二百才に及ぶとのことだった！ ゆったりとしてすらりと垂れたガウンは完全に均整のとれた体をそれとなく示しているが、後になってみんなが体にぴったりと合った制服に着かえたとき、その美しく優雅な体つきがはつきりあらわれた。

男たちはかすかに輝く白いブラウスを着ているが、ノドの部分が大きく開いており、そでは手首まであって先端がしぼってある。これは地球

の十八世紀の男が着た服にやや似ている。ズボンもゆったりして、われわれのものと同く似ている。だがその生地はこれまで私が見たいかなるものとも異なるやわらかさとキメから成るものである。

男たちの身長は約一メートル五十センチから一メートル八十センチに及び、体重もそれに比例したすばらしい体格である。婦人たちと同様に彼らも皮膚の色はさまざまだが、私の気づいたところでは一人の皮膚だけはたしかにわれわれなら銅色と呼ぶかもしれないような色であった。髪の色は異なり、ある程度まで刈っているけれども、みなきちんと整髪していた。私が最初に会った金星人の友オーソンがやっているような長髪は見あたらない。彼の場合はある特殊な目的でそんなふうにしていくことをあとで知った。

男たちの顔つきは一樣にハンサムであるけれども、地球の男の顔つきと大差はない。したがって彼らのだれが地球人のなかにまじったとしても他の惑星の人間だとわかることは決してあるまいと私は確信する。三十二、三才より年上の人ははいないように見えるが、この印象も後にファーンコンから訂正された。彼の話によると、この男たちの年齢は地球式の計算にしたがえば、四十才から数百才に及ぶそうである。

挨拶がすむとまもなく私たちは大きなダ円形のテーブルのまわりにすわるようにすすめられた。その上には澄んだ液体をそいだゴブレット（台つきグラス）がならべてある。私がこれまでに見たあらゆる物と同様に、このテーブルも透明な台がついているが、地球で知られているガラスやいかなる種類のプラスチックとも少々異なるものである。表面にはテーブルかけもなく、食刻、彫刻、装飾などはまったくどこさされていない。その材質自体がなんともいえぬほど美しいので、装飾などを必要としないのだ。

テーブルのまわりにおいてあるイスは地球の食堂用のイスとほとんど同じ型である。出席人員に応じて全部で十五あった。

一同が着席すると——私はズールとファークンのあいだにすわったのだが——ゴブレットの液体を飲むようにすすめられた。見たところ地球の最も澄みきった水と同じほどに澄んでいるが、風味は天然のアンズのジュースに似ている。甘くて少しねばりけがあり、すごくおいしい。

この宇宙人たちが地球の言語を学ぶ方法はすべて私に説明されたけれども、その装置はなおも驚くべき要素を帯びている。

私たちが室内へはいったときにまっさきに進み出て挨拶した婦人が、話上手な口調で語り始めた。

「この宇宙船は科学研究所になっています。私たちは宇宙空間に発生するたえまのない変化を研究する目的だけで宇宙旅行をしています。当然のことながら異なる言語を知る必要があります。宇宙旅行が今のようにならぬ程度にまで発達したのは、私たちが乗っているような宇宙船によって行なわれる研究の結果なのです。こんなことは金星の母船内であなただけに説明されましたが、ここでは機械設備が操作される様子を見せられませんでした。だけど、この母船内では設備が操作されるところをごらんになれますし、それらの機能をいくらか説明しますから、私たちが自然の力を利用する方法を学びとったことについて、あなたはうんと深く理解できるように」

続いて彼女はこの母船も一定の惑星に所属しているのではなく、共有物であって、多くの惑星の人々が乗り込んでおり、万人の福利と知識のために使用されているのだと説明し続けた。

「この特殊な旅行については」と彼女は話す。「婦人たちのなかの三人が地球人が火星と呼んでいる惑星の人で、他の三人は金星人です。普通

なら土星の婦人も三人ほどいるのですが、わけがあってこの旅行に参加できなかったのです。それで土星人は男の方だけです。ときには他の太陽系（複数）から来た男女がこの母船や別の同型母船に乗ることもあります。いずれの場合でも乗組員は私たちの最高の科学者から高度な訓練を受けています」

夕方早くファークンと私とのあいだに行なわれた話がまだ続いているかのように、ここでもまた地球人の直面する諸問題がとりあげられた。例のように非難やひどい批判などが出ないのが目立っていた。むしろ地球人の苦悩に対する理解ある同情が終始はつきりとあらわれていた。火星の婦人の一人がいった。

「あなたがた地球人は互いにひどい残酷さを見せたがりませんが、これはすでにお聞きになったように自分を知らない結果にすぎません。しかもこれは逆に、人間のすべてが一部分をなしている宇宙の諸法則に対して自分を盲目にしているのです。」

地球の家族のなかでは互いに感じ合っている愛というものをさかんに語り合いますが、地球人がもっていると呼ぶこの愛というのは、他人を縛る所有欲として表現されているのです。自由な状態のなかにある愛に対してこれ以上反するものはありません。他の世界で知られて表現されている愛は、地球で曲解されているようないつわりの所有欲を含んでいないのです。

私たちは愛とは神の心から万物を通じて、特に人間を通じてあらゆる物に対してまったく差別なしにそがれた一つの放射線だというふうに理解しています。実際には一つや二つのフォーム（形ある物）の中に価値を見出すことはできないのです。

一方、地球に存在するゆがんだ状態を注意してごらん下さい。それは

ただ地球人が自分自身も聖なる父も理解していないからです。この無知のために自分のやっていることを理解しないで人々はいわゆる「戦争」をひき起こし、他の国の人々、別な人種、別な宗教をもつ人々を残酷に殺したりするのです。自分たちによる自分たちの相互破壊は問題に対する解決にならないばかりでなく、地球上に更に苦悩をふやす原因になるということを経験する地球人がなせわかつくし、他の世界の私たちによく理解できません。今までずっとそうでしたし、今後ずっと続くでしょう。地球人の科学知識は一般社会や人間性の発達程度をはるかにしのいでいますから、そのギャップを急速に解消させる「必要」があります。互いの攻撃用にたくわえてある爆弾の中にかくされた恐ろしい力を地球人は「知って」います。しかもこの人たちは想像もつかない世界的な殺人という土壇場にむかってめくらめっぽうに進んでいます。これは私たちにとって奇妙に不合理なことなのです」

「そうです」と男たちの一人が同意した。「地球人の行為はときどき私たちにも不合理に見えますよ。一例をあげましょう。あなたは地球で肉親の父親をおもちでしょう？」

「ええ」と私は答えた。
「かりにあなたがご自身の血肉から生まれた二人の息子をもつとして、何かの理由で一人の息子が同じあなたの息子である兄弟を殺そうと決意して、あなたの前でひざまづいて祝福を乞うとします。その息子が自分こそ正しくて兄弟は悪いといったからといって、その願いを聞き入れますか？」

私の答は当然のことながら「いいえ」であった。

「しかし」と相手は指摘して「これこそまさしく地球人が数千年間やってきたことなのです。地球人はみな理解力の程度に応じて神を認めてい

ますし、人類の兄弟愛を説いています。が、それにもかかわらず自分たちがやりたくないことを万物の「永遠の父」にやってくれと頼みます。というのには、地球人が互いに戦争をしようとするときに、ひざまづいてよこしまな祈りをするからです。地球人は自分の生命の兄弟に対する勝利を得るために、しかも相手を殺す程度までも、「聖なる父」に自分の努力を祝福してくれと頼みます。

地球以外の世界に住む兄弟としての私たちは、地球の分裂した各グループの人々を公平に見ています。宇宙を通じて働いている、私たちの「父」の法則について多くを知っている私たちは、あなたがたをこのようなたたえまのない動乱の中に閉じ込めるような差別待遇をするわけにはゆきません。地球で発生している状態を見て私は悲しんでいます。全人類の兄弟として私たちは、私たちの手がとどくことのできる人で、しかも私たちの援助を望んでいる人のすべてをよるこんで援助するつもりです。しかし地球人に対して私たちの生き方を強制するつもりは全然ありません。

実際には地球でも宇宙空間のどこでも真の悪人は存在しません。あなたがたの多くがいうように、地球人の生活が「地上の地獄」のなかに存在するように見えるとすれば、地球人はみずから責めるべきです。他のあらゆる惑星と同じく地球も「ただ一つの聖なる創造主」によって生み出されたのであって、あらゆる惑星がそうであるように本来は一つの聖地です。もし地球の表面から全人類が突如一掃されて、生き方を知らないがゆえに自分たちの手でもたらした闘争、苦悩、悲痛などが人間といっしょになくなったとしたら、地球は美しくなるでしょう。しかし人間が宇宙の万物とともに兄弟として生きる世界ほど美しいものはありません。

人間同士が互いに未知であるからといって、同胞を無視したり侮辱したり殺したりする権利が与えられているのではないのです。

あなたがた地球人は人類の兄弟愛を遵奉するために、毎年一日を除外して創造主の父性について語ります（注||クリスマス）。しかしこのような告白の結果として生じるはずの行為のことはすっかり忘れて、もっと迅速かつ大規模な方法で地球の同胞を殺傷する方向にむかって金と力を浪費しています。こんな残酷な破壊のための努力を神に祝福してもらおうとして祈るのはおかしいじゃありませんか。

地球の各寺院、各国の為政者、家庭、戦場などから叫ばれるこのような祈りを私たちは聞いているのです。地球人がどんなに迷っているかわかりませんか。というのは、地球人は自分の子供たちのためにやろうとしないことを神にやってもらおうとしているからです。地球人がどんなに偽善的になっているかがわかりませんか。これは地球人が自分たちの神に反してやっている多くの物事の一例にすぎません。

あなたがたがこんなふうに生きて互いに分裂しているかぎり、あなたがたの悲しみはふえるばかりです。というのは兄弟の生命をうばう者は、他のだれかによって自分の生命がうばわれるからです。これがむかしナザレのイエスによって述べられた言葉の意味です。彼がいった次の言葉を思い出してごらん下さい。『あなたの剣をもとの所におさめなさい。剣をとる者はみな剣でほろびるだろう』この言葉が真実であることは地球の人類の歴史を通じて証明されています」

彼が語り終わると、地球の情景とそこで起こっている人類の諸問題が眼前にひらめいて、同胞や地球人としての私自身がつくづくなげなげな状態であった。なぜなら地球の情景とともに、このような状態を正す仕事がいかに大変なものであるかという考えもわき起こったからである。

世界中の大多数の人が背後にひそむ諸原因に目覚めていないのだ。ある程度の十分な数の人々が自己の本質を認識し、魂の底から個人の貪欲と自己尊大の欲求を捨てることによって自分を変化させようとするときにのみ、改善が実現するのである。

私が思い浮かべた地球上の諸状態に対しては、一個人、一国家、世界の一部分だけを非難するわけにはゆかないし、文明の一部分がそれを変えようとして多くの事を行なうこともできない。責任は個人にあるのだ——しかもだが他人を強制的に変えることができようか！ 数千年を通じて蓄積された誤解、分裂、権力欲などの結果である束縛を打破することは困難である。

この実感に満たされたとき、地球の実態を理解している他の惑星の子たちをつかわして、われわれに愛とあわれみの手をさしのべるようにされた。『聖なる父』に対して、私は謙虚な感謝の心でいっばいになったのである。彼らは私たちを強制的に変化させることはできないし、積極的な干渉もできないのだが、互いに『敵対して』戦争を始め、更に分裂をひき起こすかわりに、よりよき世界を求めて、『いっしょになって』努力する受容性ある人を援助することはできるだろう。

このような変化がくるまでには多くの年月を要することはわかっている。というのは、人類は苦痛や悲しみを避けられないものとみなすようになっていて、ほとんど常道から離れようとしなないからだ。

黙想からふとわれに返った私は婦人たちがイスから立ち上がるようにしているのに気づいた。

「私たちはもうパイロット服を着なければならぬんですの」と一人の美しい黒髪の婦人が説明した。「そのあとみんな機械室へ行って、そこであなたが不思議がっていた多くの物をお見せしましょう」

みんなが出て行ったので、この美しいサロンのこまかい様子を観察する機会が与えられた。

すぐ目の前の壁には大きな天体図がある。これは中心に太陽を持つわれわれの太陽系の十二個の惑星を示していた。この太陽系の周囲には、それぞれの太陽と惑星群を持つ他の太陽系（複数）が、私が初めて見るめずらしい描き方であらわされている。各惑星間には宇宙空間に存在するさまざまな大気状態の詳細が示されているが、これは地球人の私たちがまったく気づかないものである。この知識は安全な宇宙旅行のためにきわめて重要だと聞かされた。このチャートには多くの記号があるが、私には判読できない。しかしその目的は、旅行の便宜のために地球のドライバーたちが用いる多くの道路地図の記号に似ているなどと思ったら、これは男性の一人によって確証された。

この大きなチャートのむこうの、同じ壁面だが休憩室の後部寄りの方に、この母船の詳細な図面があり、それにも私にはまったく不明の各種の記号がつけてあった。

他の壁面にはこの母船が訪問したいろいろの惑星の風景画（複数）がかけてある。これらは壁にかけられた額縁つきの絵ではなく、むしろ壁画に近い。どの風景画も見る人に臨場感を起こさせるような生き生きとした感じを放っている。この特質は私が彼らの絵画や肖像画のすべてについて気づいたことである。与えられた説明によると、宇宙人たちは何をやらうとも、全身の力をこめて仕事に打ち込むので、その仕事を実際に彼らの生命力と人格の輝きで震えているという。

その風景は地球の景色を描いた絵画や写真に見られるものと酷似していた。山、谷、小川、海などを示している。

六人の婦人がパイロット服に着かえて引き返したのを見た。彼女らが

はいってくると、男たちはテーブルから起立して、その一人がいった。

「これから研究室へ行きます」

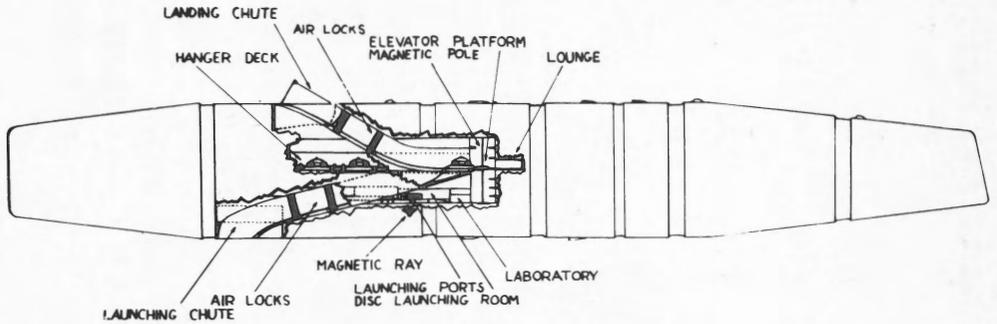
一同はいっしょになって、もとわれわれを運んでくれたエレベーターの方へ歩いて行った。近寄るとドアが音もなくすべりながら開いたが、だれもボタンに触れた様子はない。これは現代の光電池の作用に似ている。

一同十五人がエレベーターに乗り込むと、ズールが運転をひき受けた。彼は私が最初に述べたコントロールパネルと反対がわの隅にある別なパネルの方へ行くのが見えた。そこで彼がボタンの一つを踏むと、ゆっくりと音もなくわれわれは降下し始めた。

われわれが残してきた所にまだ置いてある円盤の位置から下へ降りるにつれて、その後方の船尾の方へ広がっている広大な室に私は気づいた。このコンパートメントの中央をつらぬいて、エレベーターシャフトと直角をなしながら、二本一組のレールがある。このレールには、地上からわれわれを運んできた円盤と大きさもデザインも同じの別な四機の円盤がのっかっている。見たところこれは大母船が惑星間飛行をするあいだ、円盤を収容する格納庫である。円盤の外縁にそってレールより少し低い位置に、幅約一メートル八十センチのせまい通路があり、その外がわには壁がつけてある。

最初に休憩室へはいったときに通ったバルコニーの下方にある二つのバルコニーを一同は通過した。各バルコニーはこの大母船内の別なデッキへ通じるのだらうと思う。休憩室へ通じるバルコニーから下方の三番目のバルコニーの所でエレベーターが停止した。こうして大シャフトの底から上を見上げると、船体のその側に七層のデッキをかぞえることができた。

<図4> 土星の母船の断面図



エレベーターがなめらかにとまると、手すりがゆらゆらと開いた。下方には船体の、低くなつた前部の方へ一組のレールが続いているのが見える。これはわれわれの円盤がはいるときに使用したレールとV型に交叉している。これは地球へ帰るに際して母船を離れるときに使用されるレールであることがわかつた。これで、船体のこの部分全体が離着船トネル、メインシャフト、円盤用の大格納庫で占められていることを示している。同じ部分のどこかに——格納庫に隣接するか離れた所に——整備修理工場があるらしく、更にそこから離れた所の船首の部分に操縦室とパイロットのコンパートメントがあるらしいこともわかつた。この巨大な母船の両端にも操縦室があるということだつた。船体のこの側でわれわれは広大な部屋へ案内されたが、これは研究室であることがわかつた。

● 研究室 第9章

およそ想像もできないほどに驚くべき機械設備で充満したこの部屋ののごときものを私はまだ見たことはない。ここには何列にもならんだグラフィコントロールパネル類がある。私が初めて見るこれらの不思議な機械類のいずれも、それ自体のための大きな制御盤がとりつけてあるように思われた。六台がすでに運転されていて、休憩室から同行した六人の男がそれぞれただちに他の六台の部署についた。ほかに多数の静止し

ている機械がある。四人の男の左肩に一種の徽章がついているのに私は気づいた。

私のすぐそばの所に立っていた婦人パイロットがいった。「これらの機械オペレーターはみな優秀な科学者です。四人の男性の肩にある徽章は、あの人たちが土星人であることを示しています」

他のあらゆる場合もそうであったように、ここにあるグラフ類も多く線の線や図形を描く色光を放っていて、地球で見なれているダイヤルやゲージのようなものはない。私は今多くのグラフ類を見たにもかかわらず、それらはやはり不可解なものである。

婦人パイロットが続けた。「ここは地球または私たちが接近する惑星や天体の大気密度をテストする場所です。各天体をとりにまく大気成分の組成や大気圏外の元素類の組成を精密に研究します。これらはたえず変化の状態にあるのですが、宇宙の法則にしたがって一つの活動のボタンがあります。これがある種の組成を他の組成よりも長期にわたって存続させるのです。宇宙の活動を観察しますと、大気圏外で他の物のなかに新しい天体の形成を発見して、その成長の速度を測定したりすることもできるのです」

これは驚くべきことであった。どのような変化ボタンがあるかを理解させてくれるかもしれないこれらの機械——そのなかには地球の大型テレビ受像機によく似たのもある——の働きを見つめて、その機能をつきとめるためには、私はよるこんでこの部屋にとどまりたいところだ。

しかしパイロットがいった。「さあ、あなたが不思議がっていたほかの物の方へ行きましょう」

彼女はこの大研究室から私をつれ出した。ファーンコン、ズール、婦人たちが同行する。ここで一同は船体の横幅いっぱいには広かった傾斜路を

のぼり始めた。そして別な傾斜路をのぼり続けて、ある大きな部屋の中にはいった。

驚異はいつまでも尽きないように思われた。一步動くごとに新たな驚きを感じて、やがて私はその半分も記憶にとどめることができなないのではないかと思ひ始めたが、友人たちは（書物に）書くべきときがくれば、その夜の出来事の正確な状況を詳細に思ひ出せるように援助しようと約束してくれた。

これほどの驚異、美しさ、莫大な教育的光景、音響、会話などで満たされた一夜をすごした人は多くはないだろうと思う。

さて、私はここで船体の両がわに二列にならべてある十二個の極小型円盤を見つけて、非常な興奮につつまれた。これは記録用円盤すなわち近接観測用として母船から発射される遠隔操縦機だろうと私はすぐに推測した。それらは直径約九十センチで、輝くなめらかな材質でできていて、二枚の浅い皿または車輪のキャップをふちの所で重ね合わせたような形をしているので、中心部は五、六センチ厚くなっている。しかし後にわかったのだが、このような円盤は中につめられる装置の量にしたがって、直径が約二十五センチから三メートル六十センチまで大きさがさまざまあるのだ。前にも述べたように、これらの極小型円盤には高度に鋭敏な機械が積まれていて、各小型機の予定飛行路を完べきに誘導するばかりでなく、観測地域内に発生するあらゆる種類の振動に関する完全な情報を母船に送り返すのである。

振動というものは音響、電波、光線——更に想念波動さえも含む広範囲の波をカバーしている。これらすべては記録や分析のために母船へ送り返すことができるのだ。技術上からみてもおそらくこの極小型円盤は私が今までに見た別な惑星の人々の科学技術のなかで、最もすぐれた業

續だろう。というのは、私が今までにあげた各種の機能のほかに、もし故障して地上へ落下する危険が生じたときに、地上の生命または財産が危機にひんする場合は、一種の爆発によって急速に分解するか、または徐々の分解処理法によって分解することもできるからである。この小さな空中の驚異物体は部屋の各側の広いテーブルの上にならべて、一種のミゾの中に置いてある。また各円盤のすぐうしろの壁の中には、これらの円盤が通過するのに十分な大きさの丸窓または引き窓のような穴がある。しかし一同がはいったときにはどの窓も閉じていた。

ふとその円盤から視線をかえて私は周囲を見まわした。すると人間用円盤の出口トンネルのレールとレール床が、この室の一方の端の天井から降りて、床をつらぬいて下方へ伸びているのが見えた。ふたたび記録用円盤の方をふりかえると、それらをのせている各テーブルの前面に組み込まれた長いコントロールパネルが見えた。

われわれが室内へはいったときは座席類は見えなかったが、六人の婦人が各コントロールパネルの前の部署につくと、小さな床ギのような座席が床から音もなく浮かび上がってきた。たぶん足踏みペダルを踏んだためだろう。

これらのコントロールパネルは今までに見たものとは少しちがう。小さなボタン類がパネルの中にかくされているのか、それともオルガンのように鍵盤を用いて操作されるのかはよくわからない。

ひとたびすわると婦人たちは非常に敏速に働き出した。彼女らの敏しような指は、待機している極小型円盤に指令と飛行データを与えながら装置の上で猛烈に動いている。これはパントマイムの音響のないコンチエルトを演奏している六人の婦人という光景である。一個の極小型円盤が十分な指令を受けたとき、引き窓の一つが開いて、その円盤がすべる

ように穴の中にはいり込み、エアロックを通過してから、使命を帯びて大気圏外へ矢のように飛び出る様子を見るのは興味深かった。

ズールはファーコンと私とともにとどまっていた、円盤はどこへ行ったのかと私が尋ねると、彼は答えた。「研究室へ引き返しませう。そうすれば機械盤上でその航跡を観察できます」

引き返す途中、彼は母船は今飛行中だといったが、目的地は洩らさなかった。しかし船体の動揺を感じないし、べつだん音響も聞こえない。研究室へ帰ってみると、相かわらず男たちはみな眼前の装置を操作している。スクリーンの一つにいろいろな線が新たな図形を形成しては消えたり、ふたたび現われたりするのが見えた。各線は丸い点や長い線に変化して、それからさまざまの幾何図形を急速に描くのである。同時に、他のスクリーン（複数）が明度の変化する異なった色光を示しており、パッと光るのもあれば波動となるものもある。ときどきスクリーン上に図形が描かれる。これらも大きさや模様が急に変化する。あらゆるものが私にはまったく神秘的であった。

「この人たちは各自の受持の装置によって、スクリーン上に発生する現象を記録しているのです」と土星人のパイロットが説明した。「これはみな後に教育的な記録になります」

好奇心にうながされて、われわれがさつき母船を離れるのを見たあの二個の記録用円盤はどうなったのかと尋ねてみた。

パイロットは説明した。「あの二個の円盤は今地球上のある居住地の上空に滞空して、その地域から発生する音響を記録しています。それがごらんのようにスクリーン上で線や点やダッシュなどで示されているわけです。他の機械類がこの情報を集めて、もとの音響といっしょに信号の意味を絵に変えながらそれを翻訳しているのです」

私がそれに関して何も理解しなかったことは相手にはっきりわかったにちがいない。ズールが更に説明を続けたからだ。「宇宙の万物はどれもそれ自体の特殊なボタンをもっています。たとえば、もしだれかが、「家」という言葉を口に出すと、一、二種類のメンタル・イメージが心の中に浮かぶでしょう。人間の感情を含むあらゆる物が同じ方法で記録されるのです。

これらの機械の使用によって、地球人の考えていることや、地球人が私たちに對して敵意をもっているかどうかということもわかります。もし粗暴な脅威的な言葉が出るか、またはそのような想念が発せられても、これらが同様にそれ自体を描き出して、私たちのレコーダーがそれを正確にピックアップするので、同じ方法によって、地球人のなかのだれが友好的で包容的であるかもわかります。全宇宙の万物は地球人が呼んできたように「振動」によって動いています。もっと最近では「周波数」といっていますが——。私たちが他の惑星の言語を学ぶのは、この周波数すなわち振動によるのです」

相手の説明のあいだ、私はスクリーンと、たえず変化するいろいろなボタンを見つめていた。そのすべてが比較的簡単だと思ひ、なぜ地球の科学者がずっと以前にこれと同じ方法を思いつかなかったのかと考えてみた。この考えを言葉として出さないで思い浮かべていると、友は答えた。「地球の科学者はある程度思いついているのです。これは地球のテープその他の録音方法と大差はありません。原理は同じであって、ただ私たちがもっと進歩しているだけです。音響再生用だけの多くの周波数を集めることにとどめないで、私たちはそれを画像に転換させることができるのです。あなたがたはテレビジョンといっている娯楽設備により簡単な方法でこれを行っています、それでもまだせまい知識でしばら

れています」

このことを私に説明しているあいだ相手は多くのスクリーンを熱心に見つめていた。説明が終わると彼は極小型円盤室へ行って、あの小さな使者たちが帰ってくるのを見ようといひ出した。

私たちがその部屋へ着いたとたんに船体の壁についている大きな丸窓のように見える同じ型の二つの引きドアが、帰ってくる極小型円盤を受け入れるために開いた。すると円盤はまるで何かの見えない手でそっと置かれたかのように適当な場所へ落ち着いた。

今起こっているこの新たな驚異的光景に反応を示す余裕はなかった。ズールが静かにいったからだ。「見続けなさい！ 室の両側にある別な円盤が発射されますよ——今度は目的がちがいます。私たちはまだ地球の大気圏内にいるのです。これらの円盤が出て行ったら研究室へ帰りましょう。それが動く様子がわかりますよ」

見つめていると、最初の二個の円盤に隣接した引きドアがそのうしろですぐしまった。すると両側の壁の、その列よりも下方にある別な二つのドアが開いた。そのあいだずっと婦人たちは装置パネル上で敏速な無音の演奏を続けている。

二度目の二個の円盤が船体を出発すると、われわれ三人は大研究室へ引き返したが、そこで初めて私は別な二つのスクリーンが作動しているのに気づいた。このスクリーンは数区画に分割されている。

ズールが説明した。「これらは多種類の大気の状態を示しています」一区画には空気の動きを見ることができたが、一方このスクリーンの表面を信号類が動くにつれて、空気の速度と密度が他の装置によって記録されていた。大気の電荷または磁気力は反対の方向に動いているように見えるが、これはスクリーンの別な区画で見られる。一方その組成（

負荷の軽重であることがわかった)が測定され記録されていた。三番目の区画には大気を構成するガス類が分離され、たえず起こっている組成の急速な変化をここで見る事ができた。地球の科学者がまったたく気づいていない大気の圧力のさまざまの高低や、その他多くの状態を見るのは実に興味深い。これがスクリーン上で再生されているあいだ、同時に別な装置によって記録されるのだが、これは永久的な記録となり、しかも他の世界の住民による未来の研究用になるのである。

わずか数分間がすぎたとしか思えないのに、(発射された)円盤たちは母船内に引きもどされた。そして聞いたところによるとそれらは地球の大気のサンプルを内部に入れているという。これはあとで出されて調査されるのだろう。

ズールが語る。「地球の大気圏の端で形成される異常な状態に私たちが初めて気づいたのは、このような円盤を用いたからです——地球上で爆発させられる各原水爆によってたえず増大する状態です。そしてこれらの装置は常に作動していますから、私たちが宇宙空間を進行するにつれて何を予期すべきかを知らせてくれるのです」

研究室内で語りながら立っていると、私の注意はパイロットのそばにある特殊なスクリーンに引かれた。彼がいう。「そこではあなたがたが“宇宙ジン”といっているダストの映像が見えますよ。これらは今二個の円盤によって瞬間的に送り返されているのです」

スクリーン上でこの微小な物質の動きを見るのはおもしろい。そこにはたえずうずまいている活動があった。ときどきこの微小物質が凝縮して固体の形になるように思われるが、消滅して実際に見えなくなる。ときどきにはこれらの形成物が非常に希薄になるので、ほとんど純粹なガスに変化したように見える。ある意味では、晴れた空に突然小さな白雲がで

きて大きくなるうとするが、急に消滅してなくなってしまう現象を思い出させた。これは少なくともこのスクリーン上で私が目撃した活動を描写するのに最も適したたとえである。

しかし微小な物体の形成のいづれも、ある量のエネルギーがたしかに可視的な固体になるように思われ、それからまた急速に爆発または突然の崩壊と思われる現象によって消散するらしい。これはスクリーン上ではっきりと見えた。他の装置類は強度と成分を記録した。ときとしてこのような(外物の添加による)膨張はものすごい勢いで起こり、続いて起こる“爆発”も同じく猛烈である。別なときにはそれらはきわめておだやかで、ほとんど見えないくらいである。しかしそのサイクルはたえまがなかった。うずまくエネルギー、固体化、崩壊。エネルギーと、宇宙空間の他の微粒子との結合または相互作用を求めてやまない微小物質との、永久の運動。私が“エネルギー”という言葉を用いるのは、自分が観察しているものに対して他の言葉が思いつかないからである。それは偉大な力を含んでいるように思われた。そして、それらが布のような薄い形成物になるかまたは雲のような形になるとき、空間の付近にあるあらゆる物をかく乱するように思われた。

全宇宙に充滿するエネルギーそのもの、惑星、太陽、銀河系を形成するエネルギー、宇宙のあらゆる活動と生命の維持者としてのエネルギー——そのものを私はたしかに目撃したと信ずる。

この実感がわき起こり始めるにつれて、そのすごい意味の半分も理解できないような気がした。私の内心の当惑を感じたのかズールが肯定するように微笑していった。「そうです。これこそ宇宙空間に私たちの宇宙船を推進させるのと同じエネルギーなのです」(以下次号)

声

例のボスターは大変美しい見事なものですね。昨年暮、書店で週刊誌を開いたところ、対談で横尾忠則氏が「空飛ぶ円盤同乗記」を読まねばならない内容のことを語っていたので「おや」と思っていました。

三月の末、偶然に群馬の沼田市から二名の高校生がヒッチハイクで拙宅に二泊していきましてので、彼らにアダムスキー情報を少し話したのですが、大変よろこんでいました。ニューズレターも見せて、群馬支部のことも知らせておきました。考えますに中学高校生はこのような情報に抵抗が少ないようです。私のことを考えますと、以前には決してUFOに否定的ではなかったのですが、コンドン委員会の報告には大分影響されたように記憶しています。彼らから引きよせるらしいです。知らない人からこれらの宇宙的な話をするのは最近本当にうれしく感じるようになります。人生の目標が出来るということは実にすばらしいことなのです。

のでしょう。円盤関係の本はアダムスキー関係以外はアリンガムの本しか読んでいなかった私にとって、T氏の本は反アダムスキー派の一部を知る上で為になったことです。ブラザーズの哲学を実践するものにとって円盤の目撃は大いなる励ましなので、単に一つの目撃事件としてファイナルされることで終るのではないのだと思いました。気付いたことは、円盤目撃前の目撃者の内的心理的衝動をあつかっていないことです。コンストンのダービシャー少年の例をのせたら彼らにとってはヤバイことですからね。やはり意識的にさけているのでしょうね。

さて疑問の点があります。円盤目撃予定者に想念を放送する際ブラザーズはその人の姿を明確に思い浮かべてやるのでしょうか。ただまんぜんとある地帯の地域住民に對して放送するのでしょうか。アダムスキーの場合は、私の考えでは前者だと考えますが、でも彼らは宇宙機内から直接観察している可能性も大きいと考えますが、でもよく考えると、意識による旅行の事を思えば何もブラザーズが直接近づく必要もないでしょう。

これは単なる想像ですが、ニューズレターはブラザーズの手に渡っているかもしれませぬ。もっと大胆な推測をすれば、会員の中にブラザーズの一人がいる可能性もあるかもしれませんし、GAP総会や例会にひそかに(絶対に気づかれないようにして)参加しているのかも！考えるだけで楽しくなります。

さて先生は九州に来られたことがおあり

ですか。来熊の節はぜひ当方へお寄り下さい。(四月二十八日付)
オーソンのカラー写真を有難うございました。実にきれいで、すばらしいの一語につきます。

さて最近手の指のオーラが見えるようになりまして。四月頃オーラが見えるようになつたらいなあと思っていたのです。五月の三日か四日の朝方目がさめてふと両手をうす暗いなかにかざして見たのです。指のまわりに七、八ミリ位のうすい霧状のオーラが見えたのです。いやその時は何か見えるなと思っただけでした。まったく初めてのことで疑問もありませんでした。それからよく指を見つめるようになりまして、やっぱり見える訳です。オーラが見えるのだなと思いました。最近是人を見るのとき気をつけているのですが、まだ身体をおおうオーラは見えませんが、昨日やはり朝五時すぎ両手を少しまざつてじっと見ると、指先から数センチ(約四センチ)位のビーム状のオーラが出ていました。これが両手を近づけるとビームがつかがるのです。そして私が一番びくくりしたのは右手の人のさし指がオレンジ色がかつた赤のオーラにおおわれていたことです。もう少ししてからお知らせしようと考えていたのですが、会員の方でご自分の能力に気づいておられない方のお役に立てばと御報告する次第です。

先生の御健康を念じます。(五月十九日付)
いつも変らぬ御奉仕、有難うございます。昨日おどろくべき経験をしました。真宗の寺の住職と話す機会に恵まれて、色々今次大戦中の話を聞いたのですが、明日葬式が

あるというのです。なくなられたのは老婆だそうで、そこまではいつもどこでもある話でした。ところが聞き手の方は生まれかわりのことを知っているものですから、興味本位だったのでありますが、どこに生まれかわったのでしょうかと聞いたら、住職はぼつと「土星」というではありませんか。これはその言葉をはいた本人も実に不思議がっていました。普通ならお浄土に生まれていきますとよく答えるのですが、考えてみれば土星は太陽系で最もすばらしい惑星ですから浄土でしょうが・・・

そこで私は土星は女性が実にすばらしいのですよといいますが、彼もその老女はすばらしく包容力のある人だったそうで、その人の愛憎気は言葉ではなかなかあらわせない様子でした。

折しも五月二十一日は真宗では親らん聖人誕生八百年の法要の最終日でした。口では浄土といっても仮空の存在としか考えられない浄土教徒ばかりではなかったのです。「意識」はすべてを知っていることがよく分りました。以上は京都の街で起ったエピソードです。(五月二十二日付)

(熊本 津野田俊行)

久保田先生お元気ですか。しばらく御無さたしておりますので、何かしら恥ずかしい気持で一杯です。毎回ともニューズレターを航空便でお送りいただき、本当にありがとうございます。もう私の誌代も切れるころだと思いますので十ドル同封いたしました。どうぞ今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

もう日本では桜のたよりがあたりこちから伝わることでしょうが、こちらも例年にないあたたかい日が続き、雪が解けて、あちこちで洪水さわぎがおきています。最近のブックストアではUFOあるいはフライングソーサーはあまり目につかず、心靈関係、ドラッグ、ESPなど、また占星術等の本が多く見られます。多くの人々が本を読み、色々なものを求めているようですが、現在の地球上で起っている苦悩や迷いを解決するカギは、やはりアダムスキーを通して伝えられた英知の中にあると思います。私は全くの凡人ですが、目や耳から入ってくる日常の出来事を思うとき、つくづくアダムスキーの偉大さを感じます。こういうわけでニュースレターの着くのをいつも楽しみにしておりますが、久保田先生御自身お体を大切に編集にお励み下さいませようお願いします。(三月二十六日)

(カナダ、オタワ 森山征夫)

先生お変わりございませんか。オーソンの肖像画が届きました。ありがとうございます。本当に美しくすばらしい方だと思えます。私はこの肖像画から若さ(活動と申せばよいでしょうか)という想念が特に感じられてなりません。

想念感受といっても本当にたいしたことではない無感受に等しい状態ですが、でもこの肖像画が目の前にあると毎日のすべてを静かにみつめられているような気もいたします。もっと私は努力しなければならぬとつくづく感じます。先生がおられないからここまでこられなかったと思います。

本当にありがとうございます。お体を大切にして下さい。私にできることでしたらなんなりとお申しつけ下さい。(六月十七日) (埼玉県所沢市 すがわらかずひろ)

毎日暑いですね。どうも暑くなるのは苦手です。さて七月二日に上智大学にぶらりと行ってきました。出身校の同じ山西恵子君に会いたくなったのです。上智大学は四谷にあります。その広いキャンパスの中でうろつきまわって数千人の中から一人だけを見つけたのは不可能です。ここでGAP哲学にのっとり、意識からの声を聞いて動くことにしました。

キャンパスに入るのは初めてで、どこに文学部の哲学科があるのかはわかりませんし、彼女とも別に連絡していたわけでもありません。まず正門から入り、大通りでもぶらぶら歩いて行きました。両側はきたない建物が並んでおり、モックで五十メートル先はまず見えません。まわりの女学生を値ぶみしながら歩いて行くと十字路になりましたので、「声」を聞こうと心を静めました。そこが文学部だったので左に行きました。そこが文学部だったので。次に事務室を見つけたので、哲学科三年の時間表を見ました。十二時少し前でしたので、学生の数が少なく、容易に見ることができ、午後も講義のあることがわかりました。

ビルの中を歩きまわった後、文学部の喫茶店のベンチに腰かけて休憩しました。さてこれからどうしたものかと思いましたが、「彼女がもうすぐここにくるから待て」と

いう感じがしましたので、二十分位気長に待っていました。私は目が疲れやすいので必ず目を閉じています。そのうち、ゆったりしていたら、急に「来た!」という声がありましたので、ふと見ると道路を歩いて来たのです。三年間も一度も会っていませんでしたので、彼女から発せられる想念を感じます。やはり本人でした。三年前のイメージとひどくかけ離れていましたので(以前はもっと魅力的だった)、すぐ声をかけるべきか否か、ちょっと迷いましたが、またすぐ会えるような感じがしたので見すごしました。彼女から発散する印象を覚えようとしたのです。相当に意地っぱりで他の女性とはすぐ区別がつかます。

ゆっくりとパンと牛乳で腹ごしらえをしてから、文学部一階ホールに行き、階段に注意しました。エレベーターや廊下は無視しました。時間表には科目と教室とおぼしき一連の数字がならんでいましたが、どうも意味がわからず、ただ「数分後に彼女が階段をおりてくるだろう」という感じがしたからです。その間彼女のことを思い浮かべて一体化しようとした。私の場合、一体化ということには慣れていません(?)ので、清水畑がいるんだぞと知らせてやりました。

数分後、彼女が友人一人と階段をおりてきました。やはり、すぐ私のことがわかったようです。彼女の発散する想念がすぐ楽しそうなものに変化しました。私は一体化の楽しさと、なつかしさと、意識に従って偶然に等しいチャンスをものしいたという勝利感(のようなもの)で彼女以上にうれ

しかったのです。

しかしあとでドジをふんだ。時間はたっぷりあるのに、わずかに数分で別れてしまったのです。あまりにも楽しかったので、つい意識に従うのを忘れ、いつものくせが出てしまったからようです。「キープ・マイ・ウェイ」のことです。

以前から気がついていましたが、中学や高校の連中と会うと、どういいうわけかわからず、は当時とほとんど変りがないようなのです。精神面の成長がほとんどみられません。山西君の場合もそうだったので、はじめて見たとき、一番はじめにショックを受けたのです。反面、かわいそうな感じもしました。補足||以前から山西君に会いたかったが、当日目が覚めてから今日は会えるという気がしていました。

質問||人を見ると、どうしても顔や姿がはっきりとわからないことがたくさんあります。私の場合、比較的高想念を発する人はどうもはつきりしないのです。久保田先生の顔も最近になってやっと輪郭がわかってきました。体自体が光を発しているような感じがして、すばらしい人間だということとは大体わかるのですが、その姿をどういいうわけか記憶できないのです。逆に低想念を発する人はすぐわかります。この理由は何でしょう。

町や山を歩いていると、あらゆることでにわかっているような気がします。どんな道もどんな山や町なみでも、以前どこかで見たような気がします。これはなぜでしょう? (七月三日)

(東京 清水畑 博)

十二日に当病院で観桜会が催されましたが、あいくの雨のため食堂で行事が開催されました。また食堂では絵、書、それに私手持の円盤関係の写真、新聞の切抜、円盤の構造図等々を展示しました。

「UFOとGAP」のスライド、大変ありがとうございました。お借りしましたスライドは計六カ所で開催致しました。延百数十名の方々が楽しまれたと思います。クラブでも上映しましたが、例のBGMが始まりますと、それまでのけん騒がウソのように静まり、熱心にご覧になっておられました。質問内容も少し高度化してきたようで、「思念とは五官以外で作用するのではないか?」「交感・知覚神経はどんな風にしてコントロールできるのか?」「自己訓練や超能力等をあなた(私)が開発して実演しながら教えていただけませんか?」等々ございました。

なおこのスライドは新学期の始まった母校八日市高校でも私のまずいスピーチと共に公開致しました。公開にあたり、在学中「地学と天文班」を創始した当時の顧問である辻先生の御援助と地学部の後輩の御協力有功を奏しました。百名近くの方々がお集まりになりました。簡単な挨拶とGAPについての説明、我々の太陽系、地球及び日本人の過去についてお話し、スライドの上映になりました。上映中の反響は「GAPという名称がやけに多い」とか、円盤に非常に興味をもっておられる今年卒業の方から「どうもトリック写真ではないか」という声もありました。

映写中、授業中と間違えてか、頭を机に

置いておられる方があるかと思えば、始めから終りまで大変熱心にご覧になっておられる方もありました。最後の質疑応答では熱心な方々が十人ほど集まり、和気あいなりの内に話し合いました。なかでも「アダムスキー様は・・・」というふうにご大変親密に語りかけられる方がおられました。約一時間にわたって天文関係の話や生命の科学、聖書問題等について楽しく語り合うことができました。また熱心な地学部の人々のためにアダムスキー氏の本の書名、出版社をお伝えしておきました。ま、何はともかく「UFOとGAP」を大変ありがとうございました。(滋賀県 関谷正明)

大変暑くなりましたが先生は如何おすごしですか。私は大変元気に毎日を送っています。七月八日、私はUFO関係書からの複写が五十枚程出来上っておりましたので、飯塚市本町にある本野木書店へ持って行き、店主に會つてUFO資料展示会の催し計画の趣旨について話し合った所、「書店の方にはかまわないからいつでもどうぞ」との事です。ここでの展示会場は三階にあつて、今日もSL(蒸気機関車)の写真展(個展)が行なわれていました。勇壮なSLではありましたが、あまりパツとしないのみえて、私が店主と話し合っている間でもほとんど見に来た人がいない有様でした。店主はある程度UFOについて知識を持っているようで、人の入りを心配してか「このような企画ならばNHKか新聞社に宣伝してもらおうよ計ってあげようか」と言われたほどです。会場はかなりのスペースが

ありますので資料の方が集まるかどうか心配です。SLの方は二つ切程度の写真で、一列に五十枚でした。私の写真はコピー用四つ切(薄手)印刷紙を使用しています。今の所五十枚程ですが、フィルムにおさめた未現像の物が三十枚程出来る予定です。全部で八十枚程かと思ひます。これを書物単位に三尺×六尺のベニヤ板にのりづけするつもりです。私は解釈程度にとどめて個人的意見は一切書かないつもりです。

三枚程まことに失敗写真で申し訳ないのですが同封致します。なにしろ装置の不備と写真技術の未熟なため、どうか見られる写真が出来るのに苦勞致しております。展示会が終了したなら十分協力出来ると思ひます。ベニヤ板に写真を貼る場合、直接ベニヤ板にはろうかそれとも何か色紙を貼った上にはるうかとまよっています。何しろ字をはっきり出すために焼付するものですから全体がいくらか暗くなるようです。それに少々すけて見えるようですから何か好感のよいベッタの色がありましたら御教下さい。

UFO関係ばかりでなく公害、戦争問題の新聞記事でも二、三かみ合わせしてみようかと思つております。また雰囲気を出すためバックミュージックを流したいと思ひますので、テープレコーダーに吹き込んで下さればありがたいのですが。またスライド映写については何しろ私一人ですので手がまわらないようです。もっとも場所がありませんが、書店の近くに一、二分程行った所に高校があります。ここが借りられるかもしれません。私は映写装置は何一つ持

っておりませんが、どのようなようになっておりますか。デパートの展示会をと思つておりましたが、書店の方が何かと都合がよいようです。また、資料関係書物への複写と展示会出品等との許可を願わなければと思つております。如何なものでしょう。貴方の関係書物(A氏著書類、GAPニュースレター、オーソン写真等)で複写、出品等との許可を御願ひ致します。展示会の日時は当分先の事となりそうです。追次連絡致します。ではこの辺にてさようなら。

(福岡県 内田格男)

—大きな写真を板にはる場合は水ばりその他の方法がありますが、簡単なものでは、すでにノリがついていて、写真をベタッと押さえつければそのままはれるようになったパネルも出て市販されています。くわしいことは画材店で聞いて下さい—編者

相変わらず不順な天候が続く今日この頃ですが、先生は毎日元気で御活動のことと思ひます。経過報告いたします。まだ母の病状に目立った変化は現われていませんが、今度市役所の福祉課から週に二日ずつですが、お手伝いさんが来てくれることになりました。今まではお手伝いさんがいなくなつた時に何度頼みに行つてもだめだったので、今の政府の福祉政策のため市の方針が変わつたのださうです。やはり母の一番気になつていた事から変化が始まっているような気が致します。まだまだ前途多難のように思われますが、すべて意識にまかせて気楽にやつてゆこうと思つてます。

(千葉県 植木じゅん一)

人間の目的とは何だろう。人間に限らずすべての存在物は目的をもっている。もしそれが目的を持たないならば、それは存在する意味を持たない。存在とは目的そのものなのであり、目的とは存在そのものなのである。目的とは因の領域であり、存在とは果の領域である。わたしたちが目的を理解しないならばわたしたちは存在していない。わたしたちが存在しているのならば目的を知るべきである。それは存在するものの義務だからだ。目的とは因であるため、それはまた神であり、創造性である。目的と存在は無限の過去、すべての初めに一体となっていた。それは過去、現在、未来へと果てしなくつづき、常に一体となったままである。だから存在とは創造性であり、破壊性を含むことはない。

人間の目的、それは人間が他のいかなる存在物とも違うものをもつところに見られる。それはすなわち心であり、分析思考力である。そこに人間の目的を知るカギが秘められている。それは思考力が因の段階にまで高められたとき、人間が英知者となるためである。因に支配されるだけの創造性ならたやすい。だが人間は因に支配されるのではなく、自分自身がいわば因の領域をつくるところにその特異性がある。そのとき人間は法則の被支配者からその支配者にまで進化するからである。思考力の目的とはここにある。それもやはり創造性である。停滞性や破壊性ではない。よって人間はすべて目的それ自体である。

目的とは意識である。英知が意識的になつたときにすでに目的はつくりられ、同時に

存在という現象が生ずる。神が意識的になつたとき、宇宙空間に存在するすべてのものが現象として因から現われた。だからそのとき現われたところのすべてのものは、創造主の意識をともった意識的存在であった。それらは過去—現在—未来を通じて永遠に意識のままにである。つまり存在とは意識的英知の具象化である。人間の原初の姿であるところの受精卵は母親が意識するとしなやかにかわらぬ確実に人間の形に変化、成長してゆく。目にも見えぬくらい小さなその卵の中には、人間のもつすべての可能性が含まれている。そしてそれが母親の体内に宿ったその瞬間に人間は目的をもつたのである。その目的は果てしない創造的進化的道である。それは破壊的退化ではない。人間は目的そのものである。彼が存在している限りは—。存在とは至福である。どのような境遇にあらうと存在とは幸福である。なぜなら起こり得るすべてのものは、悪いものも良いものもみな人間を進化させるためにあるからである。何も不必要なものも存在しないからである。人は存在という至福に感謝しなければならぬ。存在を喜び、それに謙虚になり、慎ましく生きるべきである。存在こそは神によるものだからである。人は物質を精神の上位においてはならない。人間はすでに肉体という最高に美しい物質を受けたからである。なぜそれ以上のものが必要だろうか。神による意識と心と肉体という贈り物以上に必要なものはない一つない。それを奉仕のために使うのである。特殊能力を開発して病人を救うのもいい。多くの事を学んでそれ

を人がより速く進歩するのにわかつかのいい。強健な体をもっているのならそれを人のために使うといい。とにかく人のための自分になり、利己的欲求を満たす人間になつてはならない。それは、人間とは本来個人的存在ではないからである。だからこそ数十億の人間が生きているのである。人は人によってその人格をつくり、進歩してゆく。人間はそれゆきすべてのことにおいて人に依存せねば生きてゆくことなどできない。だからこそ人を助ける人間になることが必要である。

もしほんとうに自分に対して愛情をもちたいならば、人に対して愛情をもたねばならない。人に対する愛情は神に対する愛情であり、それはそのまま自分自身に対する愛情だからである。同じように、人に対する謙虚さとは、神に対する謙虚さであり、それは自分自身に対する謙虚さでもある。人と自分と神、それは万物が存在している限りは永遠に同じままにある。これらに分離はない。人を見るとき、人はそこに神を見、同時に自分をも見るのである。

次のことを考えます。まずアダムスキーは人間のもつ自由意志を神と同じくらい重要なものと考えているということ、これは、基礎もできていない人に押しつけることを習性としている各種宗教団体とまったく性質を異にしているところである。第二に、彼の撮った写真を今だ一人としてデータもだとして実証できなかったこと。これも非常に重要なことです。肯定も否定もありません。第三に、だれ一人として今だ金星に着陸して歩いてみた人がいないことです。地球人の科学の歴史をふり返れば、理屈と現実とがいかにかけ離れたものであるかわかりますが、それほど地球人の科学者の頭は悪いのです。大体自己執着にのみその想念の九十五パーセントを支払っている地球人に宇宙の法則や実体を説く権利などあるはずもないのです。次に、ソクラテスもいったように「最も命名高き者ほど最も多く知見を欠き、最も名の知られぬ者ほど、その知見において彼よりまさっている。」ということがあります。アダムスキーはまさにこの公式にあてはまるような気がしてなりません。大体に偉大な人というのは彼が死んでから何十年、何百年もたたなければ有名にならないのがこの地球の常なのですから—。とにかくアダムスキーは、人を信じるよりは自分を分析して精神的進化的方に力をそそげといっている点で非常にすばらしい方だと思っています。それではこの辺で—。

わが国最初のUFO専門誌誕生!

待望久しかったUFOの店頭販売専門誌がついに出現した。外国には数種類あるが、この種の専門誌が出たのはわが国でこれが最初である。

創刊号はB5版七十六ページ。極上紙を使用しており長期間保存が可能である。定価三〇〇円。隔月刊で、奇数月の二十日に全国の書店で一斉に発売される。創刊号は七月二十日に発売されたが、一週間位でほとんど売れた。青少年のUFO問題に対する関心の強さに今更のように驚かされる。これはこの雑誌のもつユニークな性格にもよるだろう。

創刊号には元気象庁長官畠山久尚理博のめずらしいUFO目撃談(これだけの社会的地位にあった方が堂々と体験を述べられたことは敬服にあたいする)や写真家大辻清司氏の円盤に対する

あこがれ、「日本沈没」で有名な小松左京氏の声援、イラストレーターとして世界的に名高い横尾忠則氏の数度にわたる円盤目撃談などは一読の価値がある。また、フランスのアペロン県の農民家族に起こった奇怪な火の玉UFO事件の事実物語は豊富なイラストとあいまってすばらしく興味深い。連載記事としてはスイスの考古学者エーリッヒ・フォン・デニケンの「神々の戦車」が多数の写真と共に載っている。これはすぐくおもしろい読物だ。南米ペルーのナスカ地方に残る太古の不思議な遺跡にすどい推理のメスを入れて、大昔別な惑星から偉大な人類がすでに地球へ来ていた

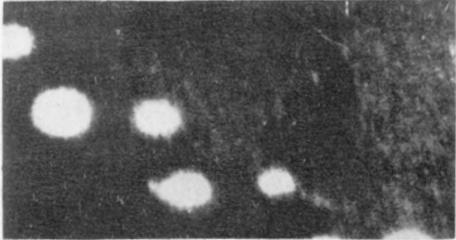
ことを示唆し、現在のUFO現象の意義について深く考えさせる大探検記である。一体にこの「コズモ」誌はノンフィクション・ストーリーだけに限っており、小説類は一切載せない。したがって報導誌の性格が濃厚である。その他にも多くの有益な記事を満載。UFOの好きな人に欠かせない専門誌である。これは丸の内タイムス、少年マガジン、サンデー毎日等で紹介されたし、全国から絶賛と激励の手紙がコズモ出版社に殺到している。

第二号(九月十月号)は増頁の上九月二十日に全国の書店で発売されるが、書店で入手できない場合はコズモ出版社宛直接に注文すれば直送してくれる。また読者のUFO目撃体験記や投稿なども歓迎しているから、UFO愛好家の討論の場にもなる。何よりもカラーと白黒のめずらしいUFO写真を多く載せているのが魅力的だ。

わが国最初の 空飛ぶ円盤 専門誌

創刊 隔月刊 7-8月号 20日発売 // 300円

UFOと宇宙 コズモ



世紀の謎UFO——空飛ぶ円盤

UFOは世界中に出現する / ケネス・アーノルドの目撃 / 戦争中にも目撃された / ラボックの光体群 / 円盤は他の惑星から来る? / 学者の論争 / ノ連でも目撃されている / やはり存在する?

UFO対談 有名4人の円盤物語

元気象庁長官 畠山久尚
写真家大辻清司
作家小松左京
画家横尾忠則

私はUFOを見た
円盤は夢をもたせてくれる
不思議な現象に関心を持つ
円盤は実在する。私は何度も見た

◇浅間山上空に円盤が出現 ◇多条光線を放つ円盤
◇フランスの怪奇——火の玉UFO事件
アペロン県の農民一家が体験した奇怪な事実物語。

ある夜の美しい出来事 / 神々の戦車 / 科学トピックス

●全国書店で発売中 ●直接本社へご注文の場合は送料85円を加算
●年ごの購読料は送料共に2000円

〒110 東京都台東区秋葉原3-3 アキパビル

コズモ出版社 振替・東京 119478
電話 (255) 878440

日本GAP大阪支部大会、盛況



去る八月十九日(日)午前十時より大阪郊外の尼崎産業郷土会館で日本GAP大阪支部大会が開催された。これについては本号に予告を出して多くの会員に機関誌を通じて事前にお知らせするはずであったところ、発行が遅れたため、やむを得ずハガキ

の招待状を関西・中国・四国方面の方にも送ったが、それでも約三十名の方が参集され、編者の講演、活発な討論、十六ミリ円盤映画・スライド映写等、午後五時までに楽しい有益な一日をすごすことができた。関係者御一同に厚く御礼を申し上げます。
— 編者

日本GAP月例研究会

大阪支部例会

1. 日時 毎月第三日曜日。午後一時より五時まで。
2. 会場 兵庫県尼崎市 尼崎産業郷土会館
電話〇六(四八八)二三五一 阪神電車「大物(だいもつ)」駅下車。徒歩三分。
3. 会費 百円。
4. 携行品 テキストとして「空飛ぶ円盤とアダムスキー(高文社刊)」を持参。

東京例会

1. 日時 毎月第一日曜日、午後一時より五時まで。ただし一月だけは第二日曜日。
2. 会場 上野公園内「東京文化会館」
電話(八二八)二二一一 国電上野駅の「公園口」下車。改札口を出たすぐ前。会館正面に向かって左側の入口から入る。奥のエレベーターから四階へ行くこと。
3. 会費 二百円。茶菓が出る。
4. 携行品 テキストとして「生命の科学(文久書林刊)」を持参。

日本GAPは左記のとおり東京と大阪支部の二個所で月例研究会を開催して会員の精神的向上と宇宙哲学の探求及びUFOに関する知識の吸収の場を提供しております。特にUFO関係のスライド映写も実施して貴重な資料を公開しています。都府内及び近郊の方はぜひご参加下さい。

アダムスキー哲学三大名著 絶賛発売中!

スペースブラザーズから伝えられた宇宙の思惟法と宇宙的な生き方とを三部に分けて詳述。GAP 会員必携の書。注文は各出版元へ直接どうぞ。

G・アダムスキー 久保田八郎訳

宇宙哲学

¥350 70

東京都新宿区納戸町33たま出版 振替東京94804

G・アダムスキー 久保田八郎訳

テレパシー

¥350 70

G・アダムスキー 久保田八郎訳

生命の科学

¥480 70

出た! アダムスキーの弟子でありコンタクティでもあったフレッド・ステックリングのすばらしい体験記と哲学! 特に幼児教育について重要な示唆を与える。宇宙問題探求者必読の書!

F・ステックリング 久保田八郎訳

なぜ空飛ぶ円盤は来るのか

¥550 85

東京都文京区白山1-29-12 文久書林 振替東京2521

本誌旧号

本誌バックナンバー(旧号)は次のものが残っています。発行部数僅少につき残部もわずかしかありません。未入手の方は早目にご注文下さい。送料は不要。切手代用もOK。

49号・51号・52号 各¥250

オーソン肖像画

ジョージ・アダムスキーが砂漠で最初にコンタクトした金星人は後に「同乗記」でオーソンという名で出てくるが、これをA氏の記憶にもとづいて画家に描かせた肖像画をカラー写真にしたものを日本GAPでは月例研究会で頒布してきた。残部が少々あるので希望者は直接本部宛注文されたい。スペース・ブラザーズとの一体化を図る上で重要な資料となるものである。

- ◎キャビネ判(11,5×16,5c) ¥300
¥40
- ◎名刺判(5,5×8,2c) ¥150
¥20

上記2点のみは直接日本GAPへご注文を。

編集後記

◎本誌の発行が大幅に遅れて会員の皆様にも多大のご迷惑をおかけし、まことに申し訳ございません。

深くお詫びいたします。多数の郵便物に対してご返事や連絡が遅れたことも重ねて陳謝いたします。また多数の方々からの激励と賛辞のお手紙を頂戴し、今夏は各方面から暑中見舞状をいただいたこと、その他有形無形のご援助をたまわったことに心から御礼を申し上げます。GAP活動を再開して以来十数年になりますが、当初より一貫して御支援をたまわっている国立九州大学の塩谷博士、馬場教授の両先生をはじめとする多くの会員の方々、途中で去ってゆかれたにしても一時期絶大な御協力をたまわった方々の御恩恵は永久に私の胸から消え去ることはないでしょう。いろいろとワ余曲折もありましたが、根本的に活動のコースからはずれれることはなかったと思っています。

◎すでにご存知と思いますが、私は今春「コズモ出版社」を設立し、隔月刊のUFO専門誌「コズモ」の発行準備態勢にはいり、人手不足ながら懸命の努力を続けて、七月二十日に創刊号(七月八月号)の全国一斉発売に至り、大好評を博して発売後までもなくほとんどの書店で売り切れという盛況でした。この「コズモ」は本誌とはやや性格が異なり、一般向けのUFO問題情報誌ですが、全国の青少年に宇宙的な視野を開かせようとする点で本質的には同じ目的を有するものです。皆様のご愛読をお願いいたします。奇数月(一月、三月、五月、七月、九月、十一月)の二十日に各地の書店で発売されますが、品切れの際は「コズモ出版社」へ直接注文されればお送りいたします(五十頁広告参照)。

◎というわけで私は信じられないほど忙ですが、従来の「日本GAP」は私の個人活動として別個に存続し、ニューズレターを発行し続けることとしてから「コズモ」誌と混同されないようお願いいたします。今後本誌「ニューズレター」は主としてA氏の宇宙的哲学の探求啓蒙機関誌とし、「コズモ」は一般UFO問題や宇宙科学の情報誌として並行します。いずれも私が独力で編集している宇宙的性格の刊行物ですからよろしくご支援のほどをお願いする次第です。

◎五十一頁の予告にありますように、本年九月から日本GAP東京月例研究会会場を豊島区民センターから上野公園内の「東京文化会館」に変更しました。ここは世界の超一流オ

世紀の謎空飛ぶ円盤を究明した最新刊!

空飛ぶ円盤の跳梁

近代宇宙旅行会会長 高梨純一著 定価八五〇円

空飛ぶ円盤の出現と共に激増する大気中の放射能、円盤から落下してくる謎の物質「エンゼルス・ヘア」、自由自在に行動する「小さな円盤」の存在、ブラジルで活動する「土星型」円盤、キリマンジャロに出没する弾丸状の物体等、円盤に関する重要にして、最も興味ある事項をまとめあげた最新の注目書!

空飛ぶ円盤とアダムスキ 久保田八郎編
偉大な先駆者アダムスキの生前未発表の体験記、論文 五五〇円

空飛ぶ円盤実在の証拠 高梨純一著
科学的方法をもって円盤の実在を見事に証明する。 八〇〇円

空飛ぶ円盤のすべて 空飛ぶ円盤の真相
平野威馬雄編著 五五〇円 G・アダムスキ・久保田八郎 五〇〇円

アポロと空飛ぶ円盤 これが空飛ぶ円盤だ
平野威馬雄・荒井欣一著 五〇〇円 平野威馬雄編 五〇〇円

空飛ぶ円盤は実在する それでも円盤は飛ぶ
A・ミンシエル・田辺貞之助訳 五〇〇円 平野威馬雄編 五〇〇円

空飛ぶ円盤実見記 火星からの空飛ぶ円盤
G・アダムスキ・D・レスラー 五〇〇円 C・アリンガム・岩下 肇 四五〇円

空飛ぶ円盤同乗記 空飛ぶ円盤ミステリ
G・アダムスキ・久保田八郎 五〇〇円 G・ペカー・平野威馬雄訳 五〇〇円

空飛ぶ円盤の秘密 各巻 特装ケース入り 発売中
T・ベサラム・久保田八郎 四五〇円 定価七〇〇〜八〇〇円

高文社

東京 文京 本郷5-30 振東141750

京都 左京 百万遍 振京23523

ケストラの演奏会場として有名で日本の音楽文化のメッカ。環境は抜群で交通至便。宇宙哲学研究討議の場所として絶好です。

都内近郊の方はぜひご出席下さい。本年も十一月に日本GAP総会をここで開催の予定です、詳細はいつでもお知らせ下さい。月例会会場は毎回同会場内の四階のどれかの会議室です。エレベーターで必ず四階まで来て部屋をお探し下さい。ドアに「日本GAP月例会」と表示してあります。

◎本号は会員の三氏から特別寄稿をいただきました。いずれも真摯な探求者ばかりで各手記はすばらしい内容です。

◎デズモンド・レズリーのジョージ・アダムスキの思い出は本誌第二十九号と三十号(昭和四十年度)に掲載したものです。内容の重要性に心がみても新しい会員の方々のために再録しました。ア氏が常人をはるかに超えた人であったことがよくわかります。次号ではスタースGAPリーダーのルウ・ツインシュタール女史の「アダムスキの思い出」を再録します。

◎アダムスキの著書「空飛ぶ円盤実見記」

「空飛ぶ円盤同乗記」の原書購入法について多数のご照会がありました。これは丸善を通じて入手できますから原書名、発行所名を明記の上、東京都中央区日本橋二丁目三〇、丸善洋書販売部へお申込下さい。

(実見記) Flying Saucers Have Landed
Werner Laurie Ltd., London
(同乗記) Inside The Space Ships
Neville Spearman Ltd., London

◎日本GAP特製「想念観察手帳」は好評裏に品切れとなりました。資金難のため目下再刊の見込みはありません。

◎日本GAP製作の各種スライドは各地で映写されて大きな成果をあげています。紙面の都合によりその報告類を本誌に掲載できないのは残念ですが、ご尽力下さった方々に厚く御礼を申し上げます。貸出しは無料ですから遠慮なくお申出下さい。

◎「コスモ出版社」の社員として久保田の片腕になる人を望んでいます。編集と営業の両部門で活動できる有能な人がよろしく、希望者は久保田宛直接にお問合わせ下さい。条件としては短大卒業以上、英文と訳ができる、アダムスキ哲学を人生のガイドにしている奉仕精神の旺盛な方、特に想念観察を熱心に行う方に限ります。(英語のできない方は採用できません)

◎去る八月十九日まで銀座のセントラル美術館で開催された「グラフィック・イメージ73」展に横尾忠則氏が出品されたセラミックの作品六点が異色ある名作として注目をあびました。アダムスキの円盤写真類をモチーフにした「UFOーアガタから」と題する作品群のすばらしいこと!

これは九月十九日まで東京都立近代美術館で展示されます。会員必見の名画です。

◎御寄付の御礼。(本年三月一日以降八月末まで。敬称略) 波田野敬一(神戸) 一万三千五百円、植木じゅん一(千葉) 三千元、すがはらかずひろ(埼玉) 六千元、津野田俊行(熊本) 一千元、野田健二(名古屋) 二千元、武田雄児(香川) 一千元、佐藤吉秀(神奈川) 一千元、清水畑博(東京) 一万五千元、山田じゅん(東京) 拡声機一式、安田正人(名瀬市) 一万二千元、羽鳥雅己(東京) 八千元、林陽(千葉) 四万円。(久保田)

1973.9

GAP ニュースレター 五三三号

編集 久保田八郎

発行所 日本GAP

振替東京三三九二久保田名義

額 二五〇円・送料七〇円